柏倉利明

作品集１

愛の行方に

57歳のわたしが
25歳のぼくから受け取ったメッセージ
「愛を見つけてくれましたか」

民話伝説 あこやの松 ―――――――――― 3
昭和38年(1963) 22歳作品
戯曲 われらの出発 ―――――――――― 20
昭和39年(1964) 23歳作品
小説 二人だけで愛しあおう ―――――――――― 50
昭和40年(1965) 24歳作品
シナリオ 三人三脚 ―――――――――― 69
昭和41年(1966) 25歳作品
あとがき ―――――――――― 83

民話伝説

あこやの松

昭和38年（1963）　22歳作品

あこや姫はその日も夜になると姫の離れ座敷にたてこもり、丸窓を開いて琴を奏で始めた。姫の美しい細い指が激しく琴の弦の上を走ると、透る様な美しい琴の音は窓から静かに流れていった。十三夜の明るい月の光がすすきの穂波を輝かせ、折からのそよ風がそれをやさしく波立せていた。

その時、部屋の外で声がした。

「あこや姫よ、今宵は一段と琴の音も冴えるのう。外はいい月夜じゃ て……」

あこや姫の父親である豊充郷であった。彼はゆっくりと部屋に入ると窓際にゆったりと座り、外を眺めながらしばらくあこや姫の奏でる琴の音に聴き惚れていた。やがて琴の音が一段落すると待っていた様に話し始めた。

「姫よ、今宵はちと嬉しい報せを持ってきたのじゃ」

「どの様なことでございましょう」

「実は先程、出羽の国の人が訪ねて来てのう、そなたを山辺の進之丞という男の嫁に欲しいというのじゃ、山辺の進之丞の家といえは、出羽の国でも指おりの名家じゃて、それに進之丞といえばこの辺りまでも武勇をとどろかせている立派なもののふじゃ。どうだな、あこや姫よ…」

「姫はまだまだ嫁になぞ行きとうございませぬ……」

「何をいうか、そなたの母などは、そなたの年には嫁いでおるのだぞ」

「でも母上と姫とは違います」

「どう違うというのだ。常のそなたらしくもない…、そなたも早く嫁いでわし達を安心させてくれい、のうあこや姫よ。それでその進之丞じゃ、なんでも早速、近日中にでも訪れさせるとのこと、そなたも会うてみればすぐにでも嫁がせてくれということじゃろうて、わっはっはっはっ……」

あこや姫はそんな父の声を聞き流すと、うつむきながら指を琴の上で弄んでいた。あこや姫の父はそんな姫の美しい横顔を見つめながら、満足気に頷くと、再び姫に琴を奏でさせた。

琴の音は青白く光る窓の外に流れ出しはしたが、その調べは先刻のそれより冴えなかった。父はそれをあこや姫の乙女らしい羞恥と解釈し姫を一層いとおしく思うのだった。

あこや姫はみちのくの信夫郡の牧主豊充郷を父として生を受けて十八年余、その気立の優しさと顔かたちの美しさは近在はおろか、山を越えた出羽の国まで知れわたっていた。更に琴の弾き手としてのあこや姫も村の長老に人の世が始まって以来も、後も、姫の右に並ぶ弾き手はないと言わせる程のものであった。

その真偽はともかく、確かにあこや姫の琴の音は、姫の屋敷に入った盗賊を改心させた程に、また子供を大鷲にさらわれて発狂した百姓女の心を静めた程に、美しく爽やかで、人の醜い心を洗い潔める、清水のような効果を持っていた。また、牧主の一人娘であるあこや姫は父母の愛を一身に受けて育まれてきたが、そ

の様な娘にありがちな勝手気ままさなど微塵も見られなかった。

数日たったある日の陽が西に傾き始めた頃、手習いをしていたあこや姫の部屋に姫の母が入ってきた。

「あこや姫よ、見えられましたぞ、山辺の進之丞様が。さあ、行って御挨拶なされ……」

「姫は会いとうございませぬ」

「何を子供じみたことを、そのようなことはいわず、さあ早う、早う……」

気が進まぬままあこや姫は、手を取らんばかりに先を促す母の後に従って何か愉快そうに談笑している父と進之丞のいる座敷に入っていった。

その時、あこや姫はそこに漂う空気が、進之丞と呼ばれる男の全身とその持ち物から発している血なまぐさいにおいに満ちているのを感じ、息をつめた。

進之丞は入つてきたあこや姫を野や山で獲物を見つけた猟師の様な血走ったするどい目でにらみつけていたが、やがて溜息混りの声でいった。

「美しいのう、この世の人とは思えぬ……」

そしてさも満足気に笑った。あこや姫は全身を針金できつく縛られた様に動けなかった。そして、もし動けたとしても、そうすればすぐ男の太刀が頭上にひらめく様に感じた。姫の父は自慢気だった。

そしてまた男同志の話が始まった。部屋を出るに出られないあこや姫の身体に、進之丞の無遠慮な視線があたる度に、姫は身の縮む思いであった。

それから小半時もして姫の父はふと思い出した様に、傍にじっと座っていたあこや姫に向かって言った。

「のう、あこや姫よ、そなたの琴を進之丞殿に泰でて聴かせたらよかろう。どうじゃな進之丞殿……」

「おお、願ってもないこと、ぜひ所望したい」

もちろんあこや姫の琴の巧みさは聞き知っていたが、琴などは婦女子の戯事としか思つていなかった進之丞は、別段あこや姫の琴を聴きたいとは思わなかったが、世渡りにたけた彼は、その様なことはおくびにも出さなかつた。

気の進まないまま父や進之丞と共に離れ座敷にもどったあこや姫は琴の前にすわり、しばらく沈黙を続けた。進之丞にとっては女だてらの高慢としか見えぬその仕種であったが、父の豊充郷には充分に理解出来ることであった。

やがて静かに始まった琴の音がしだいに部屋の中に充満してきた。あこや姫は琴を弾き続ける内に、段々、不愉快なあたりのものごとに対して感じなくなってきた。始めは内心琴などと頭から馬鹿にしていた進之丞であったが、姫の琴が興に乗ってくると、その形容し難い美しい音色に聴くともなく聴き入っていた。

やがて山辺の進之丞にとって先程のただ清く美しいだけのあこや姫がしだいに侵し難い、彼とは異った世界の人として目に写って来ることに卑屈感に似た感情

が起ってきた。それは戦場での合戦の中で白刃をかざした相手にすら抱かなかったおののきであり、彼の自信の喪失であった。そのおののきがしだいに大きくなってくると進之丞はうろたえ、その場にいたたまれぬ程の庄迫感のためにやにわに立上ると、窓際に寄り、窓を開いた。さっと月の光が部星の中に流れ込んだ。じっと立たずみ外を見つめて、せめて気持だけでもこの場から逃れようとあせる進之丞の耳になおも容赦なく琴の音が飛び込んで来る。豊充卿はそんな進之丞をちらりと見たが、また障子越の月の光に怪しいまでの美Lさを放ちながら動くあこや姫の手元にじっと見入った。そんな緊迫した時、外に何を見たのか進之丞はやにわに太刀を取ると障子をさっとあけたかと思うと、すざまじい勢いで庭に飛び出した。豊充郷は月の光の中でキラリと太刀が光ったのを見た次の瞬間、仁王立ちに立った進之丞の足もとに胴体を真二つに断切られた血だらけの野兎を見た。進之丞は荒く肩で息をしながら、だらりと下げた手に生々しい血のしたたる太刀を持つて月を見上げていた。豊充伊は黙って目をとじた。あこや姫はそんな出来事に気がつかぬかの如く、琴の音を絶とうとはしなかった。

しばらくすると、進之丞は庭から太刀を下げたまま姿を消した。気づかわしげに姫の横顔を見た豊充郷は神々しいまでに琴を弾き続けるあこや姫を少し不満気に見たが、やがて大きく頷くとそっと部屋を出た。

それから川辺の進之丞は一向に姿を見せなくなった。そのことはあこや姫にとってうれしくもあったが、姫の自尊心かちょっと首をもたげたのは否定出来なかった。だがあこや姫が進之丞に嫁いだとしても、姫には進之丞の妻として仕えていく自信が全くなかった。あの夜、進之丞が感じた様に、やはりあこや姫も進之丞とは異った世界にしか生息出来ない自分を感じていた。

一体嫁ぐとはどの様なことなのだろう。女の所有者が親から夫という別の男に変るというだけの事なのだろうか。そんなことでは断じてない、とあこや姫は思う。美徳というより厳しいまでの定であるとされている女なるが故の従順さ、親に従い、卑屈なまでに夫に仕えなければならない女の生き方、それが果してやはり人間である女として妥当なものなのだろうか。夫婦とは少なくとも男と女という人間同志による人間らしい交流であるべきだろう。しかし、あこや姫は進之丞がこんな事を解する様な男でない事を感じ取っていた。彼にとって妻を迎えるという事は、野や山で獲物を生け捕りする事と大して変らないのかもしれない。そしてその生け捕った獲物は彼の勢力の象徴である物体に過ぎぬのであろう。あこや姫は進之丞の思い出の唯一つの端緒となる、あこや姫があの夜、知らぬ間に起っていた出来事に驚き、歎き悲しみながら心をこめて作った野兎の墓の前に頭を下げながら考え続けた。進之丞が黙ってたち去ったことを、あこや姫の母はせっかくの良縁が断わられたのだと思い込み残念がっていた。豊充郷はそんな妻をなだめたりはしたが、そんな彼の顔にも一抹の寂しさともつかぬ影があった。

山辺の進之丞より正式に縁談の断りはなかったが、彼が訪れた日より一月が流れる様に過ぎた。あこや姫は進之丞を忘れることなく忘れていた。しかし進之丞という男を忘れたということで、あたかも進之丞か姿を変えたような粗野で血なまぐさいものへの恐怖と嫌悪は忘られなかった。あの時、陶酔からさめた後の爽やかな気分が打ちのめたれた野兎の血のしたたる二つになった死骸、ふいに深淵に突き落された様な悲しみと激しいいきどおり、それがあこや姫を度々おそい、生れて始めてあこや姫の内に憎悪という観念を形成させたのだった。そしてその反動としてか、姫は今まで以上に平和で心暖かい人の出現を待ち望むのだった。

月が満ち切った完全な姿を誇らし気に夜の世界に君臨している夜、あこや姫はいつもの様に自分の奏でる琴の音の世界に酔いしれていた。そんな時、一陣の風がもう枯れたと同様なすすきをざわめかせた。ふとあこや姫は手を止めた。風の中にかすかに笛の音らしい音を聞いた気がしたのだ。しばらく耳をすませたが、その後何の音も聞えなかった。

気のせいだ、そう思うと姫は再び琴の弦をはじき出した。しかし、束のロ、今度ははっきり笛の音を聞いた。それもすぐ近くの林の中に。あこや姫はその笛の音に再び琴の手を止めると暗い夜道で周囲に家の灯を見い出そうとする様にじっと聞き入った。だんだん近づいてくる笛の音は、それがこの世のものとは思えぬ程澄み、美しかった。やがてその笛はすぐ近くまで来て動かなくなった。笹の音が透る月の光の中を通って、あこや姫のもとにとどくと、姫は乎和な安らぎを、おぽえ、再び琴に向かった。琴の音と笛の音が月の光の中で和し、暗い空にとけ込んでいった。先程までざわめいていたすすきも、じっとなりを秘めると、あまりにも美しく和Lた笛と琴の音に聞惚れてでもいる様であった。

何という平和な、安らいだ歓びだろう。夢の中のまた夢の中に誘い込まれるような甘美な陶酔を心ゆくまで味わいながら、あこや姫はひたすらに琴を弾き続けていた。

やがて一曲が終った。と近くの黒い木立の間から月を背にした若者が姿を現わした。

「あなた様は……」

「そなたは……」

「あこや姫でございます」

「そなたがあこや姫か……、わしは名取の左衛門太郎、そなたの素晴しい琴の音に思わず足を止めてしもうた .どうかおしの無礼を許して下され…、今宵はそなたのおかげで楽しく過すことが出来た .それでは、姫よまた会おう。さらばじゃ」

左衛門太郎と名乗った若者は、そう言うとあこや姫にくるりと背を向け、再び笛を奏でながら暗い林の中に歩き出した。それにはっとしたあこや姫は取乱した様に、あわてて足袋のまま庭にかけ降りると、

「左衛門太郎様……」

その激しいまでの声に左衛門太郎は振り返り、姫に向かってやさしく微笑んだ。やがて彼は闇の中に消えたが、あこや姫は傍の木に寄りそいながらしばらく闇に向かって耳をすませていた。左衛門太郎の奏でる美しい笛の音はしだいに遠くなり、やがて消えたが、あこや姫の耳の深にはいつまでも鳴り続いていた。

その夜、あこや姫は容易に眠れなかった。どこかでまだ笛の音がする様な気になりながら、姫は常ならぬ心の動きを感じた。

翌日、あこや姫は昨夜の思い出の中に彷徨していた。そして左衛門太郎が去ろうとした時にとった自分の態度をたまらなく恥しく思うのだった。あの時の自分は一体本当の自分だったのだろうか。夢の様な気がする。そうだ夢なのだ。夢であるべきなのだ。あこや姫はそう思い込もうと懸命だった。かくすることにより姫は自身の羞恥から逃れはしたが、そうすることに何かしらもの足りない矛盾した気待をどうしようもなかった。

その夜も、あこや姫は離れ座敷で琴を奏でていた。しかし、普段の様に容易に興に乗らす、時折手を止めてぼんやり何かを待ち望む様な常の自分でない自分を感じながら、あこや姫は軽い腹だたしさを味わっていた。じっと耳をすませる、だが何の音もなかった。

やがてあたりは昨夜と同様に月が昇り、青白く輝き始めた。昨夜と同じ背景の前でやはり同じ物語が展開されなければならない。

あこや姫はあせりさえ感じなから、琴を奏でている。

そんな時、あこや姫は自分の頬が熱くなったのを感じた。聞えてくるのだ。かすかに昨夜と同じ笛の音が聞えてくるのだ。夢でなかったことに不安を感じながらも、胸の奥に坊佛する喜びの念をおさえようもなかった。

やがて笛の主の影が見えた。そして姫の傍まで来て止まった。あこや姫は、昨夜よりも更に自分に近寄っている若者を満足に思ったが、目をそらした。

「あこや姫よ、今宵もまいったぞ……」

「……」

「姫、そなたはいかがなされたのじゃ、先程からの琴の音も一向に冴えぬのはどうしたことなのじゃ」

左衛門太郎はあこや姫をやさしく見つめている。あこや姫の口元から突然つぶやく様な言葉がもれた。

「左衛門太郎さま、姫の昨夜のはしたない行為をどうかお許し下さい……」

「はしたない行為？なんでその様な事を言いなさる、些細な事に気を遣われるな。

何をその様に恥じる必要かあろうぞ、さあ、あこや姫よ、元気を出されい。実は昨夜、わしは嬉しかったのだ」

些細な事、そうかも知れない、本当に些細な事であったかもしれない。自分が思わず庭に飛び降りて左衛門太郎の名を呼んだ。たったそれだけの事を恥かしがった自分は愚かだった。無意識の内に取った行為を、はしたないものと決めかかり、そのことを「夢の中の出来事」にしてしまった自分が醜く思われてくる。どうして自分の気持に素直に従ったまでの行為を自分は暖かく迎え得れなかったのだろう。だがもう過ぎ去った事なのだ。もう気にする必要は少しもないのだ。あこや姫の顔は次第に明るくなって来た。そんなあこや姫の耳にはずんだ左衛門太郎の声が聞えた。

「さあ！あこや姫、今宵も心ゆくまで共に琴と笛を奏でようぞ」

頷くと姫は琴に向かった。二つの異った音色は始めの一瞬、互いにとまどう様に反発し合ったか、すぐ互いを受け入れると、美しく和して晩秋の夜の空気をゆさぶるのだった。

一方、山辺の進之丞は自分があこや姫から発散するある偉大な何物かに敗れたのをはっきり感じていた。力つき、太刀折れた様にあの場から帰路についた彼は、彼を奈落の底にたたき落した勝利者に対して、ある敬虔に似たものを感じたが、月日の経過と共にその念が醜いまでの憎悪に変っていた。単たる琴の調べのために、あの様なまでに乱れた自分がどうしても解せなかった。そして、思わず一刀のもとに切り捨てた野兎の残骸を見た時の、たまらない程の自己嫌悪、いまいましいまでの腹立ちを忘れようと努めたが、あこや姫の清く優しいまでの顔立をどうしても忘れ切れないために、それに付随するその思い出に苦しめられるのだ。

進之丞にとって人が生きるために必要とするものは、権力を欲しいままにする財力と、人より先じる強さだけだった。その二つをそなえていると自負している自分の前に現れ自分の心を乱したもの、それはおよそ権力からも強さからも離れた様な、女の弄ぶ琴の音だったとはあまりにも馬鹿馬鹿しかった。

実際あの時、自分はどうかしていたのだ。人は無意識の内にでも、自分の嫌う行動を取った後、その時の状態が常ではなかったと思うことにより、自らを慰める様に進之丞もそう思うことにより、わずかな救いを感じた。

また、思いがけぬ程の素晴しいものが自分の手にとどきそうになると、人は躊躇することなくそれを取ってしまうものである。進之丞はあこや姫のことを、それに付随するいまわしい思い出に脳まされながらも容身に忘れられなかった。そればかりか、彼はあこや姫の清い美しさをもっと確実なものとして手に入れようと機会をうかがっていた。あこや姫の琴の音がいかに優れているとしても、それが何になろう。自分は他の誰よりも強い力を持っているのだ。どうしても、あ

こや姫を自分の所有物にしなければならない、と進之丞はある夜半、こっそりあこや姫の庭に入り込んだ。

木々の間を人に見つからぬ様に姫の離れ座敷に向かう進之丞の緊張した耳に、あの夜彼をなぶりものにした琴の音が飛込んできた。いまいましそうに琴の音を振りはらうかの様に頭を左右に振った進之丞は、その音が琴だけのものではないことに気がついた。すぐ笛の音と解ったが、そのことは姫の傍に人がいることを意味する。しかし進之丞は、少しもあわてず、油断なく太刀に手をかけながら庭の木々の影から影へと忍んでいった。

しばらく闇が続き、あこや姫の部屋からもれる行燈のあかりが木の影でとどかない場所を見つけた進之丞はそこに腰をすえ、じっと見入った。彼の目に琴を奏でるあこや姫と、その姫の部屋のあかりがまちに座し、一心に笛を吹き続ける若者の姿が入った。

何者なのだろう。次第に高まって来る嫉妬心をようやく制しながら機会を待った。やがて曲は終った。あこや姫とその若者は睦まじげに語り始めた。

「おのれ！わっぱめ！」

進之丞は自刃を振りかぶると若者めがけて切りかかった。若者があこや姫を突きたおし、横に飛んだのと、太刀がかまちに喰い込んだのはほとんど同時だった。

「何をする！」

するどく若者が叫ぶ。進之丞は再び太刀をかまえ、横なぎにはらった。さっと身を引いた若者の手に細い笛が光る。進之丞は姿勢をもとにもどすと再び大上段に太刀を構えた。二人の男はにらみ合ったまま動かない。だが進之丞はあわてなかった。太刀を持っている時は、いかなる事があってもあわてたりしないことを長い実戦の経験と息づまる様な日々の生活より身につけていた。

進之丞に細い一本の笛を持ったままにらみつける若者の構えは、およそ進之丞の知らぬ型だったが、一分のすきも見い出せなかった。じっと息をつめ合った長い時間の流れの後に若者は構えていた笛をゆっくり手元にもどした。それでも進之丞は打ち込めなかった。そして突然さっと一間ばかり後に飛び下った若者は笛を唇にあてた。思わず切りかかった進之丞の太刀は空を流れたのみだった。やがて若者の口元から笛の調べが流れ始めた。進之丞は再び切り込む。さらりと身をかわした若者はなおも笛の音を続けた。

しばらく太刀を振り回す内に、進之丞は次第に全身から力が抜けていくのを感じた。この時になって始めて焦燥を感じた。力をこめて持ちなおそうとする太刀はそれでもある不思義な力に抗いきれず、ゆっくり弧を描いて下ってきた。そして進之丞の手がら太刀が落ち、彼はがくりと両ひざをついてしまった。若者はすぱやくその太刀を拾い上げると、それを大上段に構え進之丞に向かった。はっとした進之丞はひざをついたまま、後すざりをする。その顔には、醜いまでの恐怖

感があった。若者はそんなことに躊躇することなく太刀を進之丞の首元にさっと落す。

その時まで、なすすべも知らぬ様に、唯おろおろしてなりゆきを見ていたあこや姫は、思わず目をとじた。

一瞬の後、カランとした音に恐る恐る目を開いたあこやは姫之丞に向かって静かに微笑みながら立っている若者、左衛門太郎の姿を見い出した。進之丞はがっくりとうなだれていた。

「わしはそなたを知つている。そなたの名は山辺の進之丞」

はっと進之丞は顔を上げた。

「そなたの武力はかねてより聞きおよんでいた。そなたは確かに強い。だか、ただ単に強いだけだ。わしは今、そなたに勝った。解るか、このわしが何故に勝ったかが……。思い浮べるがよい、己れの首に太刀が飛び込んで来ようとする時の底しれぬ恐怖を。そなたは、今までごく当然の如く、その恐怖を幾多の人に味わせたことか。そして何の罪とがもない、平和に生を営む多くの動物達までを残忍なまでに殺傷したことか。みな、その刹那、そなたが今感じた恐れと生への執着を感じたことだろう。いかにあろうとも、人が他の人に決して死というものを与えてはならないのだ。それ程の権限がそなた達人間には断じてない」

左衛門太郎の声は、夜空に響いていった。

「今までそなたは財力や力づくで思うがままに世を渡ってきた。が、財、力、それが一体何だというのだ。人の中には財やカで動く人間もあろう。だが、その人間とてどこまで動き得るか、止むに止まれず、心に憎悪を抱きながら動いたことを、そなたは知っていたのだろうか。人の心は、その様なもので助く程に単純なものではないのだ……」

やがて左衛門太郎はゆっくりあこや姫に顔を向けたその顔は、神々しいまでに輝いていた。うなづき返すあこや姫に微笑を投げると再び笛を唇にあてながら去っていった。

進之丞はなおも、じっとうずくまっていたが、やがて嗚咽に身体を激しく動かした。その声を聞きながら、あこや姫はおぼろげながら左衛門太郎に対して泡いていたものがはっきりしてくるのを感じた。

「左衛門太郎様……」

小さくつぶやくと、あこや姫は左衛門太郎が去った闇の辺りに長いこと目をやっていた。

※　※　※　※　※　※

やがて雪と共にみちのくには早い冬が訪れた。北国の寒い風の便りに、あこや姫は出辺の進之丞が仏門に入ったことを知った。

雪の日が続いた。それでも左衛門太郎は夜になると深く積もった雪の中をことなげに歩いてあこや姫のもとに通っていた。そしていつか二人は何者にも断ち難い契なに結ばれていた。相手を慕う思いは日増に募るばかりであった。だが、あこや姫は時折左衛門の顔の中に、姫との楽しかるべき語らいの中でもぬぐいきれない寂しい影があるのを気づくともなく気づいていた。人に定められてしまった連命に全身で逆らおうと懸命に戦い抜き、それでも敗れざるを得ぬような左衛門太郎のその影が何を因とするのかを知らぬあこや姫はそのために一人心を痛めるのだった。

あこや姫の父母はもうかなり前から姫のもとに過う笛の若者のことを知っていた。だが単に楽レみを同じにする者同志と深く考えようとはしなかった。また幸せそうなあこや姫をそっとしておきたいという親心があったのかも知れない。

やがて北国の長い冬が終った。草木は急に目が覚めた様に活動し始めた。あこや姫の住む山里にも春が訪れた。軽く宙に舞う様な春の雰囲気の中で、あこや姫は名取の左衛門太郎に対する激しいまでの愛のため、日夜、悶えを感じていた。

その夜、あこや姫は左衛門太郎に寄りそいながら、その思いを恥し気に口にした。

「左衡門太郎様、いつまであこや姫はこのまま でいなけれはならないのでしょう。もうこのままでは死んでしまいそうでございます。せめて、せめて一日なりと姫はあなた様のお傍にいとうございます」

「……」

「左衛門太郎様、何故に黙っておられます。どうして姫をお傍において下さいませぬ、姫はいつでもあなた様の胸に抱かれていとうございます」

「あこや姫よ、いうな。わしとてそなたと同じ思いなのだ。だが、出来ないのだ。それがどうしてもわしらに出来ぬ運命なのじゃ」

「何故でございます。姫は何も恐れはいたしませぬ。ただ姫が望むこと、それはあなた様と一身になりたいだけなのです」

あこや姫はむしゃぶりつく様に左衛門太郎の胸に飛び込んだ。左衛門太郎はそんなあこや姫を抱き起すと、憂いに沈んだ美しい顔を優しく見つめる。左衛門太郎の胸の中であこや姫は薄く目をとじ、頭を左右に振った。左衛門太郎は、急にそんな姫がいとおしくなり、姫を引き寄せると、その背にまわした腕に力を入れた。

長い時間が二人の間を激しく、そして静かに流れた。左衡門太郎は、そのあこや姫の黒く澄んだ瞳の中に光るものを見い出すと、優しく声をかけた。

「どうしたのだ、あこや姫よ……」
「……」
「おかしな姫じゃ、一体どうしたのだ」
「左衛門太郎様、姫は悲しゅうございます」
「何故なのだ」
「これ程までに愛し合った後にも、なおもあこや姫はあこや姫であり、あなた様はやはりあなた様でございます。どうして二人は一人になれないのでしょう。それにはこれ以上の努力が必要なのでしょうか。姫にはそれが口惜しいのでございます」
　黙ったまま左衛門太郎は再びあこや姫を引き寄せると、しっかりその胸に抱いた。そして大さく見開いたその目の中にも、やはりあこや姫と同じ様な悲しみの色が見られた。
　愛とは二人の男女が精神的にも、肉体釣にも一つになろうとする現れであろう。しかしいくら、どんなに愛し合ったとしても、自分はやはり自分であり、相手もやはり相手であり、完全な一箇のものではないという必然的なもどかしさから逃れ得ないのは、どうしようもない人間の悲しい運命なのであろうか。二人が人間であるということは、その運命を甘受しなければならないということなのだろうか。そして、その運命の中で愛さねばならない者同志に与えられた道は、更に、もっと近くに歩み寄ることなのだろうか。

※　※　※　※　※　※

　みちのくに季節はずれの激しい嵐がやってきたのは、その日から五日後のことだった。吹き叫ぶ風と、地をたたきつける豪雨、無気味に天をぬう稲妻、あたりの新緑の木々は裂け、倒れ、河川は氾濫し、あまたの民家がつぶれ、多くの人命があっけなく奪われた。ようやく七日日に嵐は過ぎ去ったが、あたりは見る影もない程に荒れ果てていた。
　嵐のさ中はさすがに左衛門太郎は、あこや姫のもとに姿を見せなかったが、姫は自然の暴威に脅迫されながらも、比較的平安な気持を持ち続けられたのは、左衛門太郎に対するひたむきな愛と強い信頼のおかげであったかもしれない。あこや姫は嵐のすぎ去った後の数日間、母と共に荒れに荒らされた民家に、不安そうに暮らす村人達を慰め歩いていた。その身体は夜になると激しいまでの眠気に誘われたが、強いて琴の前に座った。そうすることにより、あこや姫は静かな落ち着きを感じるのだった。
　その夜も、琴の前に座ったあこや姫は静かに奏で始めた。普段よりも一層美しい琴の音は倒れた木々の間をぬい、泥まみれになって地に伏している草の上をはいながらも遠くに流れていくのだった。それは自然に逆らいきれない人間の哀れ

な嗚咽の様でもあり、またあきらめ切った人への慰めと希望を与えるものの様でもあった。そしてしばらく後、それがごく当然の様にあこや姫は左衛門太郎の笛の音を耳にした。左衛門太郎の笛の音もやはり、あこや姫と同じ様な響きを有していた。この美しくとけ合って流れる二つの音に、二人は願いと夢とを託すと、いつまでも音を絶とうとはしなかった。

やがて左衛門太郎は部屋のあがりがまちに腰を下すと、あこや姫もそこに寄りそって座った。それは二人にとって既に習慣づけられている自然な姿勢でもあった。あこや姫は左衛門太郎の息づかいを身近に感じながら、何もかも忘れた様にぼんやりしていた。そんな時、突然左衛門太郎は口を開いた。その顔は何故か暗過ざる程暗かつた。

「あこや姫よ、わしらのこの幸せはいつまで続くのだろうのう。少しでも長くと願って止まないのだが……。だが、わし等はいつかは別れなければならないのじゃ、いくらかたく結ばれたとていつかは……」

そんなことを突然言い出す左衛門太郎の顔をあこや姫はあっけにとられながらじっと見つめた。

「いつかは別れなければならない。それは愛し合う者のさけられない運命なのだ。それなら、今別れたとて同じこと、のうそうではないか。あこや姫よ、実は今日、わしは理由あってそなたと別れなければならないのじゃ」

驚いたあこや姫は、叫ぶ様に言った。

「いやでございます。姫はどんなことが起ろうとあなた様のお傍から決して離れませぬ。一体、いかがなされたというのでしょう」

「……」

「それはいくら愛し合うている二人でも、別々の人間である限り、いつかは別れなければならないでしょう。でもだからといって今別れても同じことだとは言えますまい。その様なことは、人はいつかは死ぬのだと言って自刃する事と同じではありますまいか。生きてさえいたらどんなことでも出来ましょう。生きているという現在の事実に意味があるのであり、それを否定することか正しい生き方ではない様に、人を慕い合うとて同じこと、今愛しみ、慕い合うていろことに意義があるのであり、いつかは別れなければならないからといって、今別れるなどあまりにも愚かな、あまりにも悲しむべき事と申せましょう」

「あこや姫よ、その通りかも知れぬ。だが別れが遅くなればなる程、それがつらくなる事であろう」

「それは確かにつらさを増すことでしょう。しかし、別れるその一瞬前までに一層楽しさも幸せも増すはずでございます。人の心はこれから先がどうなろうとも分らぬもの。ですが先は先のこと、そうではございませぬか。とにかく姫は今幸せでございます」

「……」

「左衛門太郎様、今宵はいかがなされたのですか、普段には聞かれぬお言葉、姫もついはしたなく激してしまいましたが……。本当にどうなされたのです。姫は悲しゅうございます」
「あこや姫よ、許せ。分ったのだ。わしには今夜分ったのだ」
「えっ、何を、何をでございますか」
「姫よ、耳を澄ませるがよい、ほらあの人の声だ、祈りを上げる声が聞えぬか」
「どこに……。一向に聞こえませぬが……」
「そうだった。あこや姫には聞こえはせぬのだ。姫はわしと違って真の人間だった……」
「えっ、何と、今何と申されましたか」
「あこや姫よ、今こそ、わしの由緒を明かそう。隠せるものならいつまでも隠し通そうと思っていたわしの本当の姿……、あこや姫よ、今まで名乗っていた名取の左衛門太郎とは仮の名、わしはこの世のもの、というより真の人ではないのだ。わしは出羽の国の最上の浦の平清水の山に生えている松の精なのだ。わしは今まで五百年もの間、生き延びてきた。わしは、そなたを待っていたのだ。仮ににも人間であったわしにとって自分の運命を予知できるとは悲しいことだ。運命などは予知すべきものではないことなのにのう……。あこや姫よ、はっきり言おう、わしの命は今夜限り、明日、わしは名取川の橋のかけ換えのため伐りとられてしまうのだ」
　あこや姫はその左衛門太郎の言葉の意を解しかねる様に、左衛門太郎の顔を見入った。左衛門太郎の顔は青白く月に輝き、懺悔の後の罪人の様なある安堵と不安の交錯したような色を呈していた。
「左衛門太郎様、何と、何とおっしゃいました。姫には……姫には……」
「あこや姫よ、わしはそなたと同じ人間ではないのだ。松の精なのだ……」
「それが、それがどうしたのです。姫にはそんなことは、たいしたことではございませぬ。姫にとって恐しいことは、あなた様との別れでございます」
「姫よ、わしとてつらいのだ。だがこれも抗いきれない運命、あきらめるより他はなかろう」
「いやでございます。姫はいつまでもあなた様の傍にいとうございます。どうか、姫もつれていって下され、左衛門太郎様、お願いします。姫をいとしゅう思うて下さるなら、姫を決して離さないで下され……」
「あこや姫よ、出来ることならわしとてそうしたい。だが、どうしても出来ないことなのだ。わかってくれ！」
「いやでございます。姫は、姫は……」
　あこや姫は左衛門太郎の胸の中で、激しく泣き続けた。あたかも泣くという行為のみが左衛門太郎を引き止める唯一のてだてでもあるかのように……。

左衛門太郎はそんなあこや姫を優しく抱くとじっと目を閉じていた。その内にあこや姫が、その瞳からあふれでた涙で頬をぬらしながら左衛門太郎の胸の中で動かなくなった。彼はそんなあこや姫の顔をいつまでも見ていたが、やがて決心した様に身を起すと、そっとあこや姫を離した。そして姫の傍に立ち、静かに笛を吹き始めた。しみ入る様な哀しいまでの笛の音はあこや姫と共に過した思い出の庭をゆっくりはいまわり、月の空にとけ込んでいった。

やがて曲が終り、左衛門太郎はその笛をあこや姫の半ば開いた手ににぎらせると、しょう然とその場を去っていった。しばらく行って振り返った左衛門太郎の瞳から頬に伝わった月に光る二筋の道を、あこや姫ぱ知るよしもなかった。

その頃、みちのくを襲った嵐は、名取川に大増水をもたらし、名取川の橋が流されてしまった。その橋は村人達にとって命にも代えがたい重要なものだった。彼等はその橋を渡って山に入り木々を集め、その橋を越えて田や畑へ出て働いていた。この様な生活的な深い意味あいと信仰的なまでの敬虔さを名取川とその橋に抱いていた村人達は壊された自分の家をそのままに、無残なまでに流され、跡かたなくなったその橋の跡に集まってきた。

しばらくはなす術もなく茫然と立ちすくんでいたが、村長のなだめと指揮によって、橋のかけ換え工事が進められることになった。

だが、近くの山中をさがしても適当な用木がなく、それでもやっと見つけた用木で橋をかけようとすると、何故か、なおも増水のままの名取川の流れに流されてしまったり、それが折れてしまったりして使えないものになってしまうのだった。

そんな努力が数日間続いた。村人達は次第に何ものかの強い力を怒じ恐れおののき始めた。名取川には何か橋を寄せつけぬものがあるのだ、ロ々に言い合いながら村長の顔を見つめた。村長はそんな声の中できっと口を結んで何かを考え込む様であったが、その内に、その顔に希望の色が浮んだのを村人達は読み取った。

「これをいかにすぺさか占者に占おせよう」

村人達の間に同意のざわめきが起った。村長は自ら三人の供をつれると村はずれの、嵐に壊されずに済んだ数少ない住居の一つである古ぼけた占者の家を訪れた。

しばらくの後、村長達は飛び出す様にその家から出てきた。彼等の胸の中に、今しがた聞いたばかりのしわがれた占者の言葉が大きな期待を待って残っていた。

「名取川の橋は、たとえ金や銀を持っても保たぬだろう。橋を末長く保たせるには、出羽の国、最上の浦の平清水の山に生えている老松を伐って用いることだ……」

早速、大勢のきこりが集められると、山を越えた最上の里に向かって出発した。夜通し歩き続けた一行が出羽の国、最上の浦の目的地に到着したのは陽が大分上った頃だった。遠くからも一目で分る大きな老松の傍に、ほっとして集まったきこり達は、休みもそこそこに持参した食事を始めた。

やがて最初の斧が松の根本に打ち込まれた。「コーン……」大勢のきこり達は、哀れを含んだ様な澄んだ美しいその音を、今だかつて聞いたことがなかった。

仕事は一向にはかどらなかったが、それでも陽が遠くの山派を赤くふち取りながら沈みかかる頃、辺りの山林に老松の終焉を告げるかの様な大音響を発して地に伏した。

倒された老松のまわりに集まったきこり達はそれになわをかけ、動かそうとした。しかしきこり達の大勢が力を集めてもその老松はびくともしなかった。一寸さえも動こうとしない老松相手の運搬作業は、いろいろ手をかえ、用具をかえて夜通し続けられたが、それでもその老いた松の木は相変ず、元の位置に横たわったままだった。

陽が登った。疲れ果てたきこり達は老松の傍にてんでに横になると、たわいもなく眠り始めた。そんな彼等は同じ夢を見たのだった。それは笛を持って寂し気に立ずむ一人の若者の姿であった。

やがて、村長にゆり起されたきこり達は、その不思議な夢のことを語り合いながら、横たおったままの老松に見入った。朝露に濡れたその幹の水滴を、あるきこりは彼等に全身で抵抗するあまりに生じた汗だと思い、あるきこりは嘆き悲しんだための涙だと思った。

そしてそんな表現が適切すぎる様に、老松は、幹の露を木々からもれ込む朝の陽の光を冷たく、また湯気を立てるまでに熱く反射させていた。それは静かな姿であった。

村長は再び占いをたててもらおうと、平清水の占者の家を訪れた。占者の家に入り早速、占いをたててもらった。熱心に祈りを上げる占者の後で、村長は頭をたれながら意外に若い神の声を聞いた。それは松の精が占者にのり移った声らしかった。

「そなた等が大勢で助かそうと試みても、びくともしない理由は、わしが他の人間の手にかかってこの地を去りたくないからだ。わしが喜んでここから動く時、それは信夫の館に住むあこや姫の手にかかる時だけだ…」

村長はそれを聞くと早々にその占者の家を出て、きこり達に知らせた。そして、早速信夫の館まで使いを立てた。

あこや矩は左衛門太郎が去ってから、彼が残していった笛を胸に抱いて昼も夜も泣き続けた。姫は泣くという行為の中でのみ左衛門太郎を感じられたのだ。しかし、あこや姫には信じられなかった。左衛門太郎が松の精だという事も、そして別れだと言った事も。夜になると、ひよっこり左衛門太郎かあの優しい微笑みを浮べながら現われるだろうことを期待し続けた。

しかし、その期待は空しく破られた。そんな悲しみの中ですごす姫のもとに平清水よりの使者がとどいた。とっさに左衛門太郎の言葉を思い出すと矢も楯もたまらぬ様にその舘を後にした。

平清水に着いたあこや姫は、林の中に横たわる老松を見たと思つた瞬間、姫の目には老松は消え、その代り一人の芳者か静かに横たおっていた。それはあこや姫が深く愛し、今なお忘れ得ない左衛門太郎その人だった。

「左門衛太郎さま！」

駆け寄ったあこや姫は、その若者の胸に顔をうずめたが、その胸からはかつての鼓動を聞くことが出来なかった。

姫はふと顔を上げいぷかし気に左衛門太郎の顔に見入った。青白いまでのその顔に、その時陽の光があたった。彼は心なしか微笑んだようだった。

再び左衛門太郎の胸に顔をうずめたあこや姫は、ようやく左衛門太郎の死を信じることができた。

そして、そんな彼が、時間の経過と共に、あこや姫の身体と心に侵透して来るのを感じた。姫はふと、左衛門太郎の死があたかも姫があれ程までに望んだ愛する者が一つになりたいという望みの具現化の様に思えてくるのであった。姫は心の中に棲み始めた左衛門太郎に静かに、そして、満足気に語りかけた。

「とうとう、姫達は一人になれましたね」

「そうだ、姫よ、ようやくわし等は、ばらばらな二人ではなくなったのだ」

しかし、二人が望んだものが、この様な一方の現実からの消滅でしか達成できないとは、生きているものにとってあまりにも皮肉なことではなかろうか。

「左衛門太郎様、姫は前にも増して幸せでございます」

「わしとて……。しかし、わしは……」

やがてあこや姫の目の前の左衛門太郎の姿は消えた。そしてもう単に老いた松の木でしかないものが横たわっていた。あこや姫は立ち上ると清々しい声でいった。

「さあ、行きましょう！名取川の橋となって、末永く人の為になるよう……」

姫が松の木に手をかけると、それはまるで水に浮いた木の様に軽々と動き出した。

やがてその老松は立派な名取川の橋となり、幾多の嵐にも耐え、幾世の人達にその恩恵を与えた。

あこや姫は、その後、実は松の精だった左衛門太郎が住んでいた平清水を訪れた。そして、もう去ることのない人と静かに幸せに満ちた会話を続けるために、かつてその老松の生えていた地にささやかな庵を建てて移り住んだ。更に、伐りとられた老松の後に、若松を植え育てた。

若松は次第に成長して、いつしか山をおおう様になっていた。その松の緑は、千歳の秋にも、寒い北国の冬にも変ろうとはしなかった。人々はその山を千歳山と名づけ、あこや姫が建てた庵を万松寺と号した。月の明るい夜、その万松寺のあたりから、美しい琴の音と笛の音が今でも聞えてくるということである。

完

戯曲

われらの出発

昭和39年（1964） 23歳作品

とき　1960年代後半

ところ　安アパートの一室

ひと　森村真一

森村健二

草岡よしえ

管理人(声のみ)

一

真一のアパート。夜七時頃。

夕食が済んで、部屋のかたわらの狭い台所でよしえが食器を洗っている。部屋の中央には食事に使われたテーブルが置いてあり、そこに真一がぼんやり肘をついてよしえを見ている。

真　一　よっちん、もういい。後は俺がする。こっちに来いよ。

よしえ　うん、あともう少し。

真　一　本当に後でちゃんと洗っておくから、こっちに来いよ。いいかげん、もう。

よしえ　また。真ちゃんの言うこと信用出来ないわ。昨日だってそうじゃない、後でするなんていってて、全然、洗ってなかったじゃない、来てみたら。

真　一　へへへ……。だから、今日は本当にちゃんとやるよ。だからさ、ね、よっちん。

よしえ　はいはい。でももうじきだから、そこてタバコでもでも吸って待ってらっしゃい。

真　一　うん。

よしえ、肩をすくめて微笑。ハミングし出す。食器洗いが続く。

真　一　ね、タバコどこだっけ。

よしえ　タバコ?さっき吸ってたでしょ。ああ、ほらそこ、机の上に…。

真　一　とって。

よしえ　目下勤務中です。ちょっと手を伸ばせば届くでしょ。しようのない真ちゃん。

真一、傍の机の上からタバコを取る。

真　一　マッチ。

よしえ　いっしょに置いてあるでしょ。

真　一　ないよ。ねえ、マッチ。

よしえ　ないって……あっそうか。(エプロンのポケットからマッチを取り出す)ほら。(マッチを放る)

真一、タバコを吸い出す。

真　一　灰皿ないよ。

よしえ　はいはい。（台所から、洗つたばかりの灰血を持って来る）

真　一　もう終った？

よしえ　もうちょっと。いい子だからおとなしく待ってらっしゃい。

よしえ、軽く真一の額を指で突いてまた台所へ。ハミングを続ける。

真一、タバコの煙を天井に向って大きくはき出す。

しばらくして。

よしえ（エプロンで手をふきながら）さあ、終ったわ。お待ちどうさま。（真一の向いにすわる）

真　一　よっちん、コーヒー飲みたい。

よしえ　あたしも。真ちゃんいれてよ。

真　一　俺がか。

よしえ　あたり前よ。自分のコーヒーじゃない。あたしはまだ真ちゃんの奥さんじゃないんですからね。お客さまにはサービスするもんだわ。

真　一　めんどうだな。よそうか、コーヒー飲むの。

よしえ　何いってるの。自分で飲みたいって言つたくせに。さ、さ、文句をつべこべ言わないで、早く、お湯は沸いてるわ。

真一　あんなこと言うんじゃなかったな。

真一立上って台所へ。よしえ、微笑しながら見ている。

真　一（台所で）ね、よっちん。俺たちの貯金どの位たまった？

よしえ　ええとね、十万円とちょっとくらいかな。どうして？

真　一　三十万円もかかるかな、本当に。

よしえ　そりゃ必要だわ。それでも少い位よ。式を挙げたり、いろいろなもの買ったり、それに旅行だって行きたいし。

真　一　結婚式、本当にやる気か。俺はいやだよ。あんなの意味ないよ。

よしえ　また。式くらいちゃんとやりましょうよ。そこで誓うのよ。森村真一は草岡よしえの夫として、妻を充分に愛し、尊敬し、本当に尊敬するのよ。今みたいにことあるごとにお前は馬鹿だ、馬鹿だ、なんて言っちゃだめよ。ええと、それから、生涯の良き伴侶となることを誓いますか？

真　一　あ？

よしえ　森村真一、誓いますか？

真　一　（コーヒーを持って来る）いやだよ。

よしえ　あら、いやだ。いやよ、誓ってよ。でなきゃ、あたし真ちゃんの奥さんになってあげないから。それでもいいの。

真　一　本当に尊敬するのかい。俺がこのよっちんを。冗談じゃないよ。

よしえ　まあ、失礼ね、いじわる。

真　一　でもさ、俺、本当に結婚式なんて嫌いなんだよ。もう何度も言ったろ。

よしえ　ええ、ええ、何回も何回も聞きました。結婚式なんて偽善だ。神だの、仏だの信じてもいないものの前で、しかつめらしい顔をして将来を誓い合う。あんなものは内容のない、ただの形式だけだ。古い大人どもを満足させてやるだけだ。そんなものをありがたがって厳粛ぶってやる奴の気がしれない。いいか、よっちん。俺たちには神も仏もない。あるのは自分たちだけだ。また、結婚するのは古い大人たちじゃなくて俺たちなんだ。その俺たちの結婚式が、ただ形式だけの内容のないものだったら、やったって意味がない。分ったな、よっちん。だから、偽善に満ちた結婚式なんて止めよう。もう暗記してるわ。

真　一　だったら何も、いまさら結婚式を挙げようなんて言わなけりゃいい。

よしえ　でもね真ちゃん。一生に一度のことだもの、たとえ形式だけに過ぎないとしても、ちゃんとした式を挙げたいの。女ってね、子供の頃から結婚式にあこがれているのよ。勿論、相手の人や結婚の意味なんて考えないでね。お振袖に高島田、純白のイブニングドレス。理屈じゃないんだわ。夢なのよ。そんな夢を見ながら成長し、やがて恋をするの。結婚て何のことか分らなかった頃から、段々分って来る頃まで、その夢はずうっと続くのよ。素晴しい、美しいものとしてね。あたし、真ちゃんがどんなこと言っても、式だけはちゃんと挙げたいわ。ね、式だけは正式に挙げさせて。

真　一　だったら、こんなのどうだ。俺達二人と友達五、六人連れてお寺へ行くんだよ。本堂の仏像の前に坐るんだ。俺とよっちんは前に坐り、友達は後だ。みんな珠数もってね。やがて坊主さんが出て来て、俺達の前の仏像の前に坐る。そして木魚をポクポクやりながら、お教を読むんだ。なんまいだ、なんまいだ。俺たちも友達も、みんなでなんまいだ、なんまいだ。これで終り、どうだこんな結婚式は。仏前結婚式ってやつだよ。正式だよ、これは。

よしえ　いやよ、そんなの。いじわるねえ。ああ、あたし真ちゃんなんて好きになるんじゃなかった。たくさんいたんだから、あたしを好きで、好きでたまらないって人がね。

真　一　嘘つけ。誰もいなかったじゃないか。

よしえ　あら、いたわよ。

真　一　本当か？

よしえ　本当よ。三人ばかりいたわ。

真　一　おいよっちん、誰だそいつは。

よしえ　あら、嫉妬してるの。へえ、真ちゃんが。へえ、真ちゃんらしくもない。何よ、いつもは、嫉妬なんてものは、低俗な感情で、現代青年のやることじゃない、なんていってながら。へえだ。

真　一　ね、本当にいたの、そんな人。これ嫉妬じゃないよ。たださ、参考までにね。

よしえ　いたわ。三人よ。すごいでしょ。

真　一　ね、そいつ俺の知ってる奴かい。ね、誰だよ言えよ。こら、よっちん。

よしえ　へへへ…。う、そ、よ。

真　一　馬鹿やろう。

よしえ　安心した？だったら、真ちゃん。ちゃんと結婚式を挙げましょうよ。

真　一　いやだよ。

よしえ　何さ、いじわる真のけちんぼ。婚約したときだってそうじゃない。俺たち婚約しよう、なんて言うから、いいわって言つたら、じや左手だせ。目をつぶれ。あたし真ちゃんにしてはめずらしく準備がいいんだなあ。指輪をはめてくれると思ったの。そしたら、何よ。薬指に、ピンクのリボン巻いて、結んで、はいおわり。がっかりしちゃったわ。あんなの十円もしないじゃないの。

真　一　何いってるんだ、あとでちゃんと高いやつ買ってやったじゃないか。

よしえ　あらいやだ。買ってやったじゃないか、ですって。二人の貯金をおろして買ったんじゃない。

真　一　へへへへえ。

よしえ　何かへへへえ、よ。でもね、本当は、あたしうれしかったの。真ちゃんがあたしの左手の薬指にリボンをつけてくれたときね、ああ、真ちゃんらしいなあって。

真　一　そうさ、センスあるんだよ、俺。

よしえ　またすぐつけあがる。とにかくね、式はちゃんと挙げるわよ。いいわね。命令だから。絶体服従よ。

真　一　じゃさ、こんなのどうだ。

よしえ　また変なの言うんでしょ。いやよ。

真　一　まあいいから聞けよ。こいつはまたね、ロマンチックなんだ。やっぱりさ友達を連れて行くんだよ。ま、大人もいたっていいな。

よしえ　今度はどこよ。

真　一　湖。白樺と原始林の間にある湖だよ。夜、空にはたくさんの星が輝いている。林の中を通って吹いて来た風が、俺たちの頬をなで、やがて湖に小さな波を作る。あたりは全く静かなんだ。俺たちは、湖のほとりに大きな火を燃すんだ。火をかこんで俺たちは坐るんだ。よっちんは俺の丁度向いだ。友達もめいめい坐る。やがて明るく楽しげにコーラスが起る。みんなの歌は林の木立の中へ、湖の水面へ、高く澄んだ空へ流れていく。火は燃える。燃える炎の間に俺とよっちんは目と目とを見つめ合う。君の瞳には燃えさかる炎が写っている。きっと俺の瞳にもね。やがて、めいめい　がたいまつを持つんだ。俺とよっちんが持っている自分のたいまつに、真中のファィヤーから火をうつす。そして俺はその火を隣りの友達のたいまつにうつしてやる。その友達は次の人に、やがてみんなのたいまつに火が点ると、ファィヤーを消すんだ。みんなの顔が火に揮いている。やがて、俺たちは湖の岸辺につけておいたボートに乗るんだ。よっちんは　君の最も親しい友人とともに、俺も友人とボートに。みんなの乗ったボートは湖の中央に進んでいく。コーラスをしながらね。やがて中央に来ると、コーラスはハミングに変わる。俺の乗ってるボートをよっちんの乗ってるボートに寄せつける。そしてよっちんが俺のボートに移り、俺のボートの友人はよっちんが乗ってたボートに移るとハミングはコーラスに変わる。俺たちを囲んでいるボートの上の火が湖の水面にうつっている。やがて俺はよっちんを乗せて、反対側の岸に向ってこぎ出すんだ。友人達は　そのままで歌い続ける。やがて俺たちのボートは段々と遠のいていく。そ　して岸につき、二人で湖の方をながめる。水面にうつるたいまつの火、空の星、コーラスは次第に低くなり、消えていく。それから俺とよっちんの二人だけの旅行。二人だけの出発なんだ。どうだい、こんな結婚式は？

よしえ　いいわ。ロマンチックね、本当に。でも夏ね、どんな洋服でしょうね、着物じゃおかしいもの、着ればいいのかしら。それに、そんな湖あるかしら。

真　一　さあね。あるだろ、さがせば。

よしえ　素敵でしょうね。まるで童話の王子様とお姫様みたい。

よしえ、いつの間にか真一の傍にいる。頭を真一の肩によりかけ、遠くを見ている様子。

真一は時折、よしえの顔をのぞき込む。二人しばらく無言。

突然、目覚し時計のベルがなる。

よしえ　あっいけない。もう時間よ。帰らなけりゃ。

真一　早いなあ。もうそんな時間か。もう少し、いろよ。送っていってやるから。

よしえ　ううん、帰る。明日もまた来るわ。

真一　本当に帰るの？よっちん。いいだろ、今日は泊まっていけよ。な、よっちん。

よしえ　だって…。

真一　一緒に住もうよ。な、よっちん。そしたら、俺がめしたいてやるよ。

よしえ　出来っこないわよ、あなたには。

真一　出来るさ、前はちゃんと一人でやっていたんだから、うまいもんだよ。だからさ、ねえ、よっちん。

よしえ　馬鹿ねえ、真の甘えん坊。今日は帰して、ね、いい子だから。

真一　いやだよ。帰さない。よしえのけちんば。

よしえ　やだあ、けちんぼだって。…その内ね。

真一　その内っていつ？

よしえ　そうね、その内よ、だから、ね。

真一　その内か、きっとだよ。じゃ、今日は送っていく。

二人、抱擁しようとする。

ドアがノックされる。

よしえ(少し身体を雑して)誰か来たわ。

真一(よしえ　に近づいて)隣りだよ。

再びノック。今度は強く。

よしえ　やっぱりここよ。

真一(大きく)誰？

健　ニ(ドアの外で)兄さん、俺だよ。

よしえ　健ちゃんね。

真一　しょうがないなあ。こんな時、来やがって。なあ、よっちん。

よしえ　馬鹿ねえ。さあ、入れてあげなさいよ。

真一、ドアをあけてやる。

よしえ　こんばんわ。

中に入った健二、よしえを見て立ち止る。

健　二　兄さん、俺また来る。(帰りかける)

よしえ　いいわよ、健ちゃん。あたしいま帰るところだったの。さあ、いらっしゃいよ。

健　二(よしえに)すみません。こんばんわ。

よしえ　すみませんってことないわよ。兄さんの所ですもの。

真　一　どうしたんだ健二、こんな時間に。何かあったのか。

健　二　うん、ちょっと相談があって…。

よしえ　あたし帰るわ。

真　一　おい、待てよ。送っていくよ。

よしえ　いいわ、道は明るいから。駅まで行って車で帰るわ。

真　一　そう。

健　二　兄さん送っていけよ。俺はここで待っているから。

よしえ　本当にいいわ。じゃおやすみなさい。またね。健ちゃん、さよなら。

真　一　悪いな、じゃまたな。

よしえ出て行く。真一と鍵二しばらくドアの方を向いて立っている。

真　一　ま、立つてないで坐ろうや。どうしたんだ。一体?

健　二　(すわる)うん。

真　一　コーヒーでも飲むか?

真一、テーブルの上のカップを取り、台所へ行く。

健　二　兄さん。

真　一　あ。

健　二　兄さん、あの人と結婚するつもり?

真　一　(カップを洗いながら)ああ。

健　二　やめなよ、結婚なんて。

真　一　(振り返って)何だって。

健　二　俺たち兄弟には、まともな結婚なんて出来やしないよ。

真　一　どうして?何故だよ?

健　二　何故?兄さんこそ何故そんな質問するのよ。俺たちは家庭というものか

ら断絶された人間だ、って教えてくれたのは兄さんじゃなかった?話してないんだろ、彼女には。

真　一（苦し気に）ああ。におわせてはあるんたが…。（強く）はっきり言ったって、気にはしないよ。そんな娘じゃないよ、あいつは。

健　二　分らないよ女なんて。理屈はそうでしょ、でもあたし出来ないわ。感情的だからね。きっと兄さんが嫌になつて離れていってしまうと思う。本当のこと聞いたらね。

真　一　じゃあ、どうすればいいんだんよ。

健　二　だから結婚なんて止めろっていってるんだよ。

真　一　婚約しちゃったよ。

健　二　いいじゃないか婚約なんかしたって、解消するのに法律杓な手続きが必要なわけじゃない。そんなもの男と女の二人が作った偽りの社会的拘束に過ぎないよ。

真　一　なるほど、しかしね健二、法律的な拘束力がないからこそ、婚約というものは意味があるんじゃないかい。するにも、しないにも要するに二人の問題だということにね。相手を信ずること、相手を愛すること、どこまで信じられるか、どこまで愛することが出来るか、それが婚約というもんだろ。

健　二　兄さん、いつからそんな安っぽいヒューマニストになり下ったのよ。俺たちのどこをたたいてもそんなもの出てきやしないはずだよ。

真　一　前はそうだったよ。確かにな。でもその頃は息苦しかったな、毎日　の生活が緊張の連続だったよ。俺はね、やすらぎ、安息が欲しいんだよ。疲れてしまったんだよ、もう。

健　二　逃避さ、そんなもの。兄さんは安息が欲しいって言った。しかし、俺たちにとってそれは安息の幻影に過ぎないよ。

真　一　分ったよ、もう。お前今日少し変だな。どうしたんだ、何かあったのか。さっき相談したいって言ってたな。

健　二　俺ね、今日会社に退職願いを出して来たんだ。辞めることにしたよ。今月いっぱいで。

真　一　辞める?本当か、おい健二。

健　二　ああ。

真　一　何だ理由は?

健　二　理由って……そうだな、嫌になったんだよ。つくづくね。このサラリー

マン生活ってやつがね。

真　一　いいかげんにしろ！そんな嫌いになったなんてことは理由にならん。そんなことでいちいち辞めていたら、どうなるんだ、これから。もっとよく考えてみろ。

健　二　考えたんだよ、俺。長い間ね、それでどうしようもなかったんだよ、辞めるよりね。一時の気まぐれやなんかじゃない、分ってくれよ、兄さん。

真　一　それだけじゃ分らん。詳しく説明しろ詳しく。

健　二　分ってるだろ、兄さんには。

真　一　……。

健　二　サラリーマンが嫌いなわけじゃない。サラリーマンにもいろいろあるからね。俺ね、どうしても大学に行きたい。たとえ一日や二日くらいめしを食わなくても、とにかく行きたいんだ。

真　一　分る、その気持は俺にだってよく分るよ。だが俺はこうしているじゃないか。俺だけじゃない、他の同じような連中がどんなにいか。しかし、何も辞めてまで大学に行こうとしなくたって、その気さえあれば夜間にでも行けばいいんだよ。

健　二　駄目なんだよ、それじゃ。通用しないんだよ、夜間じゃね。

真　一　いいじゃないか、例え通用しなくても大学は大学だ。それだけ劣等感がなくなるってもんだ。

健　二　違うんだよ。そりゃ兄さんの考えはそうだろうけど、俺は違うんだ。

真　一　どう違うんだ、俺とお前は。

健　二　言ってもいいかい。

真　一　ああ、言ってみろ。

健　二　兄さん、いま言ったね。兄さんだって同じ気持だって。でも実際は行けやしないんだよ。また夜間が通用しなけりゃそれでもいい、劣等感だけはなくなるっていったね。兄さんていうのはそんな人間なんだ。

真　一　つまり俺は消極的だってわけか。

健　二　消極的？ちょっと違うな。消極的でも行動は起すわけだよ、一応は。でも兄さんのはまるで何もしないんだよ。一人で自分のからの中にとじ込もっちゃっているんだな。バイタリティがないんだよ。全ての希望を捨てきった中で、軽ろうじて小市民的な平和を味わっているだけだよ。しかも、いつくずれるかも知れない幻影のね。

真一　そうかも知れない。でもそれだっていいじゃないか。それで俺自身満足しているなら。

健二　満足？本当に満足できるの。出来っこないよ。俺たちにはあんなみじめな過去があったんだよ。今だつてひとときも忘れることのでき来ない過去が。

真一　いいじゃないか、人のことなんて。俺には俺なりの考えがあるんだ。放っといてもらいたいな。

健二　それなんだよ、それが兄さんの生き方なんだ。批判すれば、さっと自分のからの中に入ってしまい、自分に関係がないって顔をしてしまうんだ。みじめだよ、それじゃだめなんだよ。

真一　放っといてくれ。そんな事位、俺自身承知しているんだ。

健二　（冷笑）

真一　俺のことはどうでもいい。どうするんだお前は、これから先。

健二　予備校に行くよ。来年の試験の時までね。

真一　そんなこと聞いてるんじゃない。どこに住んで、どうやって食っていくか、それを聞いているんだ。独身寮、出なきゃならないんだろ。

健二　住み込みで新聞配達することに決めたよ。さっきその話をしてきたんだ。

真一　大丈夫かそんな新聞配達なんて、第一病気でもなったらどうするんだ。

健二　そんなこと考えていたら何も出来やしないよ。分ってるよ。兄さんが心配なのは俺が兄さんの負担になることなんだろ。

真一　ああ、俺はごめんだぞ。今の内にはっきり言っておくが、どんなことが起っても、泣きついて来るなよ。

健二　分ってるよ。そんな時はひと思いに死んでやるよ、きっぱりとね。

真一　ああ、そうしろ。但しだ、ちゃんと後の葬式のことまで考えておけよ。

二人黙り込む。

少しの間。

真一　健二、今夜は泊っていけよ。

健二　うん。

少しの間。

健二　兄さん。

真一　あ。

健　二　俺ね、この間親父の家族に会ってきたよ。もっとも話はしなかったけどね。

真　一　よく分ったな。

健　二　うん、おふくろに大体聞いていたからね。でもさがしたよ大分。

真　一　よせよ、聞きたくないよ。

健　二　親父が生きていたらなぁ。面白かったと思うよ。兄さん、向うの家族のこと知ってる？

真　一　知らないよ。おいよせよ、もう。

健　二　三人兄妹らしい。いろいろ聞いたよ、近くの店やなんかでね。一番上の奴は親父がやっていた会社に勤めているらしいよ。将来は社長ってわけだろ。二番目の奴は、大学院だってよ。下の娘はK大学生、仏文科だって。テレビのホームドラマだね、やりきれないなあ、全く。

真　一　……。

健　二　おふくろの奴、何で俺たちを産んだんだろうね。兄さんはともかく、俺までさ。怨んだなあ昔は。二人でよく泣いたっけね。でも今はかえって生れて来てよかったと思っているよ。俺はね、兄さん、あいつらのためだけでも大学へ行きたいんだよ。

真　一　何かやろうっていうのか、お前。

健　二　分らない。でもとにかく何かやらなけりゃね。あいつらのためだけではなくて、もっと大きいもののためにね。でも何をやっていいのか俺にはまだ分っていないんだ。

真　一　出来ゃしないよ。この社会の中では。

健　二　確かにね。でも俺は信じたいんだ。俺にはその何かがやれる才能を持っているってことを。俺にだけじゃなく兄さんにも。

真　一　まあな。そうでも信じなきゃ、生きていけないよ。

健　二　でも、ね兄さん。俺達の外に会ったことも話を聞いたこともない兄妹がいると思うと、何だか変な気持だね。

真　一　……。

健　二　兄さん……。

真　一　もう寝ようや、な。明日はまだ、会社に行くんだろ。

健　二　うん……。小説書いてる？

真　一　ああ、少しずつな。お前はもう文学を止めたのか。
健　二　とっくにね。兄さん。……兄さんはいま幸せそうだね。
真　一　まあな。
健　二　俺にはいつ来るんだろう、幸せが……。

〈暗　転〉

二

それから一ケ月たった日曜日の夕刻。同じくアパートの真一の部屋。隅で健二が真一の小説の原稿を読んでいる。
よしえ入って来る。

よしえ　あら健ちゃん、来てたの。夕刊の配達はもう済んだの、今日は？
健　二　うん、今日の夕刊は休み。
よしえ　あっそうか、休みね今日は。真ちゃんはどこか行ったの？
健　二　一緒じゃなかったの？
よしえ　今日まだ会ってないわ。
健　二　どこへ行ったんだろう、兄貴のやつ。俺もう腹へっちゃった。めし食うつもりで来たんだけどなあ、しょうがないなあ。
よしえ　いいわ、あたし用意してあげる。おかずも買ってきたから。
健　二　草岡さん、いつも会事の準備してやってるの、兄貴の？
よしえ　ううん、いつもってほどじゃないわ。時々ね。
健　二　どうしてそんなことするの？
よしえ　どうしてって…。
健　二　つまり兄貴を愛しているから？婚約しているから？
よしえ　そうね、見ていられないのかもしれないわ。それに好きなの、勉強にもなるでしょ、こうするのが。
健　二　ふうん、そんなものなのかねえ。
よしえ　何していたの？

健　ニ　兄貴の小説読んでいたんだ。

よしえ　ああ、それね、どうなのそれ。あたしには、よく分らないんだけど。

よしえ台所に行き、夕食の単備を始める。

健二原稿をめくりながら。

健　ニ　うん、前より少しは良くなったけど、まだまだだね。ただ器用なだけだよ。

よしえ　どういう意味？

健　ニ　つまりね、今文壇で流行しているような小説の模倣に過ぎないってこと。新しさがないんだな。兄貴の個性的な新しさが。それにまだ甘いし、文体もよく練れていないし。

よしえ　ふうん。そうなの。彼、張切っていたんだけどなぁ。こりゃいいぞ、できたできた、こいつぁ傑作だって自慢していたんだげどね。

健　二　兄貴らしいや。だめだなあ、兄貴は。

よしえ　どうして？

健　二　自己満足が強過ぎるんだよ。うぬぼれっていうのかな。とにかく現在の時点ですっかり満足しちゃってね、自分をより高めようなんて気はないんだなあ。例えばね、文芸雑誌の新人募集に投稿してみようともしなりゃ、同人雑誌に入つて大勢からもまれてみようなんて気にもならない。誰に見せるでもなく、単に自分だけで、いい、いいって喜んでいるんだ。これじゃいつまでたっても成長しいよ。兄貴の気持は分るんだけどね。

よしえ　どう分るの？

健　二　つまりね、兄貴は批判が恐しいんだよ。なにも小説に限ったことじゃないけど、自尊心が強いんだよ。それも変な自尊心がね、劣等感の裏返しの。批判されたら、こんちくしょうって立直って刃向っていくような兄貴じゃないでしょ。批判される、けなされるってことはね、兄貴にとっ　ては存在の否定なんだよ。今まで立っていた地面が急にくずれ去って、奈落の底へまっさかさま。それが兄貴にとってはたまらないんだよ。だから、そんなことのない世界で自己満足を続けている、兄貴ってそんな男なんだな。

よしえ　分るような気がする。でも真ちゃんは別に小説家になるつもりはないのよ。趣味なのよ。毎日の生活が生活でしょ。健ちゃんの言い方じゃないけど、それこそ自尊心の傷つけられ通しよ。それで何かこう自分で本当に自分の力だけで創り出すってことの中に生きがいを見い出してるんだ　わ。だから、発表すること、多くの人に読んでもらうこと、それは大きな問題じゃないのよ。あ

たしはね、それでもいいと思うの、近頃は。真ちゃんがそれで満足しているなら、そしてそのことで生き生きした生活が送れるなら。

健　二　違うんだな。そんな安易なものじゃないんだよ、文学っていうのは。そりゃ確かにある面には自己満足もあるよ。でもね、それだけで終ってはならないものなんだよ。よく俺は商売でやっているんじゃない、趣味でやってるんだ、なんていうでしょ。でもそれは文学や芸術の世界では許せないことなんだよ、芸術に対する冒涜だよ。そんなのは単に負けおしみでしかないんだよ。今のままの兄さんだったら、あまりにもみじめ過ぎるよ。仕事もまあまあなら、文学もまあまあ、どっちつかずで一生終ってしまうんだなあ。

よしえ　真ちゃん、苦しんでいるのよ。いつか言ってたわ、俺は本当は文学なんぞ要らない生活が欲しいって。彼にとっては愛情すらそれに代れなかったわ。あたしね、真ちゃんとつき合い、愛すようになった頃、文学から遠ざかれない真ちゃんが少しうらめしかったの。寂しかったの。でも近頃はそんなこと問題じゃないの。あたしは今のままでも充分幸せよ。

健　二　草岡さんは兄貴のこと本当に愛しているんだね。あんな兄貴だけど。

よしえ　そりゃ、だってフィアンセですもの、あたしの。あたりまえよ。

健　二　弱いなあ、俺。でも婚約したから好きなんじゃなくて、好きだから婚約したんでしょ。でも、俺…。

よしえ　でも？何、言ってよ。

健　二　うん。あのね、気にしないでね。でも俺、今の兄貴と草岡さんを見ていると不安になって来るんだ。

よしえ　どうして不安なの。あたし達ちっとも不安じゃなくってよ。

健　二　あのね、今のあなたと兄貴ね、あまりにもとじ込もり過ぎているように思うの。兄貴のペースにまき込まれてしまっているようなんだな。二人は現実から逃避した一つの小さな枠の中で幸福を感じていると思うの。全然社会性のない、というより社会性を放棄したところで満足している。これは恋をしている二人なら誰でもそうなるんだろうけど、兄貴があんなだからよけいね、それが強いと思うんだ。そりゃ兄貴が今のようにならざるを得なかったことは分るんだ、痛い位にね。でもそれは兄貴一人の問題として処理すべきじゃなかったのかなって思うの。個人的には処理できる　ものでも二人になるとそうはいかなくなる。だって二人がいるってことの中には当然社会性が入ってこざるを得ないもの。そうすると社会性の放棄から成り立っていた今までの幸福が、次第にくずれて来ると思うんだ。だからね、安易に結婚しない二人の間がいつまで続くかっていうのは、要するに二人の間にどれ程の社会性が入っていたかによ

るんじゃないかな。でないと、別れた後になっても、あの時の幸福つていうものは、一体何だったのだろうっていうことになるんだと思うのよ。

よしえ　よく分からないんだけど、ただ気になるのは、さっき健ちゃんが言ったわね、兄さんが今のようにならざるを得なかったことが分るって、あれはどういう意味なの。

健　二　俺達の過去のことだよ。兄貴から何も聞いていない？

よしえ　詳しくは聞いていない。ただ俺の子供の項は不幸だった。だからこそ俺は自分の家庭を幸福に満ちたものにしたいんだって言っているわ、いつも。

健　二　あまり言いたくないな。

よしえ　どうして？だって、あたしは彼と結婚するのよ。やがては健ちゃんのお姉さんになるんじゃない。他人じゃないわ。

健　二　うん。でもこの世の中の夫婦の中でどれだけ相手を知っているだろうね。きっと知らない面の方が多いと思うんだ。だってお互いがまるで別の親から生まれ、全く別の家庭や環境の中で育ってきた他人なんだもの。それに相手の過去やなにかを知っているってことは、それほど問題じゃないんじゃない。大事なのはこれから二人で作っていく歴史だと思うんだけどなあ。

よしえ　ええ、そうかもしれないわ。でも知りたいのよ。彼の何もかも全部知りたいのよ。彼を、真ちゃんをもっとあたしのものにしたいの。

健　二　草岡さんの気持ぜ分るんだ。でもねえ……。

よしえ　言って、お願い。聞かせて。

健　二　（じっとよしえの顔を見て、やがて決心する）うん。じゃぁ話すよ。その前に、っていうよりもう話し出すわけだけど、俺と兄貴の性格は似ていると思う？

よしえ　そうね、あまり似てないわ。というより全然別ね。

健　二　そうなんだ。一つの同じ過去から出発した俺たちが別の方向に歩いていたんだ、気づいてみたらね。でも二人は似ているところがあるんだ、分る？

よしえ　よく分らない。

健　二　あのね、二人とも排他的だっていうこと。エゴィストだっていうこと。そりゃエゴイズムがどの位世の中にとって迷惑かは充分に知ってるさ、でもそうならざるを得なかったんだよ。つまり俺達の過去の生活が他の人とは同じような考え方に立てないようにしているんだよ。

こんな俺たちにはヒューマニズムなんてくそくらえなんだ。兄さんのように感

受性が強く、何事でもよく考える人間は、誰よりも今の社会の矛盾を知っているんだ。そんなこと二十才にもなってからギャアギャア言いだす連中とはわけが違う。そんなことはもう子供の頃から知っていたんだ。もちろん、理論とかとしてのそれじゃなく、感じではあったけどね。身体いっぱいで感じ苦しんできたんだよ。人間のどんづまりの姿ってやつをこの目で見、この耳で聞き、この手で触れてきたんだ。そして所詮人間っていうのは一人ぼっちであり、他人とは決して一つになれないもんだってことを子供の頃に覚っていたんだ。俺たちはどうしても他人なんか愛せないんだ。もっとも兄さんは近頃、ヒューマニズムを認めるようになってきているけどね。この小説にもそれが少し出てきているように思う。でもそれはいまの兄さんだからなんだ。そして、それにはやはりそれにたどりつくだけの長い道程があったとは思うんだ。

よしえ　……。

健　二　草岡さんに聞くけど、あなたは、自分の親父さんの顔を知っているでしょ。

よしえ　……ええ……。

健　二　そうだよね、どんな貧しい家展でも、父親が早く亡くなっりした家鹿でも、写真や何かで自分の親父の顔くらい知ってるよ。親父にまつわる思い出があるよね、親父の存在というものを否定するにしろ、肯定するにしろ。ところが俺達にはそんな親父の顔すら知らないんだよ。最初から親父なんぞいなかったんだよ。

よしえ　どうして、だって…。

健　二　簡単なことだよ、子供が生まれるなんてことは。何も定まった家庭というものが必要じゃないんだ。とにかく男と女がいりゃそれでいいんだから。俺達のおふくろはね、二号さん、妾だったのよ、早くいっちまえば。戦争中だよ、俺が生れたのは、他の男達が戦地に出て命がけで戦っている最中にね。ま、こんなのはよくある話だけど、それが自分のこととなりや全く別の話だよ。

俺が生まれてすぐ戦争がひどくなってきた。それで俺たち母子はおふくろの田舎に疎開したんだ。やがて東京は空襲にやられ、それまで戦地には行かずうまく立回っていたはずの親父は空襲の時死んでしまった。もっとも家はそのまま残ったらしいけどね。

それで俺たちはそのまま、田舎にいついてしまった。勿論、親父の家では俺たちにかまってなんかくれやしない。かえって厄介ばらいしたってんでせいせいしていたんだろ。いま、もし親父が生きていたらなんて思うことがある。そ

したらあるいはもっと違った生き方をしていたんだろうけど、そんなこと言ってみても始まりゃしないさ。それで、俺たちの田舎での生活が始まったわけ。近い親戚のない田舎での生活がね。

よしえ　……。

健　二　田舎で、俺達はよそものだったし、誰も相手にしちゃくれない。みんな俺達を白い目で見るか、石を投げるかだ。ね、あなたは学校にはだしで通ったことある？小学校のＰＴＡ会費ね、それも特別安くしてもらっているやつを何ケ月もためたことがある？また冬のさ中、それも東北の冬だよ、あんかもこたつもない、ましてゆたんぽすらないせんべいぶとんの中で、母子三人が身体で暖め合って過したなんて想像すら出来ないでしょう。

あなたは少くても日に二度は食事をとっていたと思う。だけど俺たちは一日何も食えない日があったんだよ。それで夜中に兄貴と俺はよその畑へ行って果物をとってきたり、いもを掘ってきたりするんだ。善いとか悪いとかそんなもんじゃない、とにかく腹が減って、腹が減ってね。何回か、それが見つかってねえ。大人たちから死ぬほどぶんなぐられたことがあるよ。おふくろは勿論、誰にも相手にされない。一度なんか俺と兄貴の前でおふくろが大人からなぐられたことさえあったよ。

俺と兄貴は、他の子供達が俺達に見せびらかして食う菓子が食いたくてねえ、おふくろのいない時、おふくろがかくしておいたサイフをあけた時があるよ。金を盗ろうと思ってね。それを見て俺連は、子供の俺達だよ、絶望的な思いになったね。それでもひっこみのつかない俺達はその中から金をとって、二人で菓子を買いに行ったよ。美味いなんてもんじゃない。　二人でこっそりかくれて食った。

やがておふくろにばれる。俺達をなぐる元気もない。ただ泣くだけだった……。

よしえ　……。

健　ニ　そんなことは終戦直後の物のなかった頃では、よくあることだったろう。でも俺達の場合はいつまでも続くんだよ、それが、いつまでもね。吹雪の強い日、俺はおふくろの赤いはなおの高げたをはき兄貴がぞうりをはいて、ひとつのマントに入って学校へ行くような日がね。先生が見かね　て俺達に長ぐつを買ってくれた。そしたら他の子供達が、俺達が先生から特別あつかいされているって、石を投げられるやら、けんかをうられるやらしてね、生傷がたえなかった。俺達はこっそり田んぼの中のあぜ道をかくれるように歩いたりしたもんだ。帰ってからも家から外へ出られない。俺連があまり身体が強くないのや、スポーツをやらないのはあの頃、外で遊べなかったからだと思うよ。始業

前や昼休み、校庭のかたすみに学年の違う俺と兄貴はすわって、他の子供かが遊びまわるのを見ていたよ、黙ったまんまね。

それから、俺達の生活が割合に、といってもまあ食事の心配をしなくても良くなった時がやってきた。おふくろはそのために俺と兄貴の愛と信頼を、憎悪と不信とに変えるという代償をはらってね。兄貴が中学に入り、俺が小学校五年になった時だった。

よしえ　もういいわ、やめて……。

健　二　（かまわず続ける）俺達はそれまで少なくてもおふくろを愛していた。でもおふくろは女だったんだな。いや、それまでの息苦しい生活に自暴自棄になって、とにかく逃げ出したかったのかもしれない、俺と兄貴のためにという大義名分をひっさげてね。俺たちのあばら家に知らない男の人が来るようになったんだな。そいつはくだらない奴だったが金は少しはあったらしい。

その時から俺と兄貴はおふくろを軽べつし憎むようになったんだ。考えたなあ。貧乏っていうこと。俺たちに「おじちゃん」って呼べだってよ。そりゃ「お父ちゃん」じゃないんだから「おじちゃん」だろうけれど、冗談じゃないよ。とうとう呼ばなかった。

家でよく一緒に食事をしたよ。そんな時は、俺達がそれまで食べたことがないようなものが出たけど、味なんか全然分らない。始終うつむいて黙々とはしを動かしていたね。やがて夜、一間きりの部屋だ、隅っこのひとつのふとんの中に、かけぶとんを頭からすっぽりかぶって、声を殺してていた兄貴と俺、その時の気持なんておそらく分ってはもらえないでしょうね。

ある時は、なにがしかの金をもらって遊びに行ってこいなんて家を出される時があった。夜中にだよ。店なんかあいてやしない。それでも夏はまだよかった。川原の土手や田んぼのあぜに寝転んでていることもできたから。でも冬、吹雪の夜、俺達はどこへ行きゃよかったんだよ。兄貴と俺はよその家のわら小屋に忍び込み、見つけ出される恐れと寒さのためがたがたふるえていたよ。

それでも、勉強だけはと頑張った俺達はなんとか高校へ行かせてもらえたよ。そんなおふくろの犠牲とやらのためにね。そして、兄貴が東京に行き、俺が高校を出て、東京に来てまもなくおふくろは死んでしまった。世間ていは肺災かなんぞになっているが、自殺だよ。葬式はみじめだった。兄貴と俺は泣くでない、終始、黙っていたなあ……。

よしえ　……。

健　二　こんな過去を持つ俺達だ。こんな俺達は土台、人のやれることがやれないのは分りきったことなんだよ。自分の母親でさえ愛せず許せない俺達、他人なんか愛せやしないじゃないか。

それでも俺達はぐれたりはしなかった。ぐれることですら甘ったらしいことだったんだ、俺達にとっては。また社会がどうしたのこうしたの、あんなのも子供じみてるし、甘ったれていることだ。

俺達は一匹狼なんだ。とにかく自分で自分の仕末をしなけりゃならないんだ。でも、最近兄貴は変った。兄貴は始めてといっていい、人の愛を味わっている。あなたのおかげでね。俺はそれを壊してやろうとは思わないけど、そんな逃避が我慢できないんだよ。兄貴は前はもっと精悍だった。今みたいに愛だ、恋だなんてでれでれしちゃいなかった。反抗的だった。怒りに燃えていた。

でも分らないんだ。こんな俺達の怒りを誰にぶつけていいのか。

間。

健二　ね、草岡さん。これが俺達、兄弟の過去なんだ。あなたが知りたがっていた、あなたが、よりあなたのものにしたいと願っていた森村真一のね。

よしえ　あたし…、ああ、あたしには分らない、どうしたらよいか、ああ……。

健二　そんなことはあなた自身で決めるべきだ。もうここまで言った以上、あなたに対して俺は何の釈明もしない。これからのあなたが行く道を自分で考え選ばなきゃならないんだ。

よしえ　健ちゃん、どうしてあなたしゃべってしまったの。あたし、あたし、ああ、あたし……。

健二、じっとよしえを見つめている。しばらくの間。

よしえ　(ぽつんと)帰るわ。

よしえ逃げるるように部屋を出て行く。

残された健二、中央に立つ。

健二　俺だって何も、好きこのんで、今まで生きてきたわけじゃないんだ。俺だって、俺だって出来ることなら人を愛したい、ちっぽけでもいい、満足できる幸せが欲しい。

健二、立ちつくす。

少しの間。

真一、あわてて部屋に入って来る。

真一　(強く)あ、健二、一体どうしたんだ。何があったんだ。あいつにそこで会った、いま。どうして俺をさけるように走っていったんだ。え。おい、健二。

健二　(ぶっきら棒に)俺、話しちまったよ。(真一をじっと見て)俺達のむかしをね。

真　一　（飛びかかろうとする）なにぃ、お前……。（急にしおれ）お前、どうして……。

真一、頭をかかえてしゃがみ込む。健二、じっと見つめている。

しばらくの間。

健二　立て、立つんだ、兄さん。女がなんだ、愛が何だ。ちっぽけな幸せが一体なんだというんだ。そんなもの俺達には所詮無縁のものなんだ。

真　一　健二、お前は、お前は…。

健　二　立つんだ、兄さん。

真　一　お前には、お前には分っていないんだ。俺が今の生活にどれだけ幸せを感じていたか。どれだけ満足していたか。俺がどれだけあの娘を必要としていたか。それがどうして悪いんだ。どうしてそれを壊す必要があるんだ。

健　二　……。

真　一　俺はな、確かにからの中の幸せしか味わえない男かもしれない。一生、表面に出られることがないかもしれない。このままでいけばな。しかし俺は満足していた。そりゃ確かに浅い満足かもしれない。だが俺は正直、そんな満足にひたり切れる俺がうれしかったんだ。一匹狼、そりゃ結　構だ。だがお前のように力んでみたところで、どうしようもないことなんだ。一体何ができるというのだ。

二人顔を合せたまま立ちつくす。

次第に興奮が消えていく。

健　二　（ぽつんと）兄さん。悪かった。

真　一　いいんだ、もう。

健　二　でも、はつきり草岡さんが離れたわけじゃないんだし、ね、兄さん。

真　一　（寂しく傲笑する）……。

健　二　もし、これで離れていくような人だったら、彼女は所詮たいしたことがなかったんだ、きつぱり諦めるべきだよ。正直、俺は兄さんが結婚するのは反対じゃない。むしろそうしてもらいたいんだ。でも、兄さんには兄さんに適した相手が必要なんだ。しっかりこれから兄さんを助け、励まし、理解してくれる人がね。だから俺ね、どんなに話してっていわれても、話さないこともできた。でもいけないこと、やってはならないことだとは思ったけど、草岡さんを試してみようと決心したんだ。

その結果、こんなことは俺が言っちゃいけないことだけど、どうなるか知らない、とにかく俺はあの人がどんな人なのか知りたかった。表面のきれいごと

だけじゃなくあの人の本心をね。
だって俺にとって草岡さんは、いつか出会うかもしれない俺の相手を代表するような女性なんだと思ってしまった。それに、兄さんの結婚は、俺にとっても初めての家族、姉さんをつくることなんだからね。

真　一　……。

健　二　それにさ、兄さん。兄さんには過去に対して責任はないんだし。むしろあんな過去から、こんな兄さんになれたってことは、兄さんだったからこそなんだと思う。立派だよ、えらいよ。少しも過去のことを表面に出さず、いつも明るいもの。草岡さんはそんな兄さんを愛しているんだと思う。きっと兄さんから離れていったりはしないよ。

真　一　でも、俺はそんなに立派でもないし、えらくもない。ただ、いままで精いっぱい生きてきたんだ。いいよあの娘のことは……、でもな……。

健　二　え？

真　一　あの娘が俺から離れていったら、俺は、これからもうずうっと、恋なんかできないだろうと思うよ。俺から好きだなんて言えやしない。もしも、俺を好いてくれる人がいて、俺もまた好きだったら話は別だけどね。でもこんな俺だ、よっぽどの人でなきゃ好きになってはくれないだろうよ。

健　二　兄さん。

真　一　健二、俺ね、今日どこへ行ってきたか分るかい？

健　二　いや。

真　一　俺もね、見てきたんだよ、親父が残した家族たちをね。正直いって腹がたったなあ。あの何十分の一でもいい。おふくろに回してくれたらってね、俺たちだって、もっと素直な人生が送れたろうってね。でもいいんだ。

健　二　兄さん。

真　一　お前、おふくろのことまだ許していないのか？
許してやれよ、もういいかげん。おふくろだって犠牲者だったんだ。可愛そうな何もできない、それでいてお前や俺を育てなけりゃならない一人の女だったんだよ。
俺はね、あの頃は確かにおふくろを憎んでいた、貧乏でもいいからとにかく平和な家庭であってほしかったよ。でも貧乏というもの、それからくる屈辱にたえることっていうのは大変なことなんだよ。ましてや能力のある人間にとってはね。おふくろはかわいそうだった。あんな死に方をしな　ければならなかったなんてね。人間なんて、男と女なんてどうしようもない程のもんなんだなあ。いや

それが人間なのかもしれないな。それでいて、みんなそれぞれ生きていくんじゃないかなあ。

健　二　兄さん、俺……。

真　一　な、いいかげん許してやれよ、な。

健二、うなだれる。

〈暗　転〉

三

そして、一週間過ぎた。

晴れた休日の午前、同じく真一の部屋。

真一とよしえが向い合って坐っている。

よしえ　あたしは何も、真ちゃんが嫌いになったわけじゃないの。今だってずっと愛しているわ。でもね、あたしは決心がつかないのよ。今までのような生活を続けいくことが。

真　一　それで一ケ月位会わないでいようってわけだね。

よしえ　ええ。

真　一　要するに嫌いになったってことだろ。いいよ、何も一ケ月なんて言わなくても、これから先ずうっとでもね。

よしえ　真ちゃん、何てこというの。あたし、そんな女に見えて。馬鹿馬鹿！真ちゃんの馬鹿。（真一にむしゃぶりつく）

真一じっとそのままにさせておく。

しばらくよしえは真一の胞の中で泣きじゃくり続ける。

よしえ　あたしね、この間、健ちゃんからあんなことを聞いて、それは　ショックだったわ。あの夜は眠れなかった、とうとう。次の朝、どうしてもお勤めに行く気がしなくて休んでしまったわ。そしてね、一日中お部屋に閉じ込って考え続けたの。でもやがてあたしはっと気づいたわ。真ちゃんには何の責任もないんだってことに。そりゃ確かに真ちゃんの過去はあたしが想像できない程に暗くみじめなものだったと思うの。でもそれは真ちゃんが好んで選んだことでも、真ちゃんのお母さんだってやりたくてやったことじゃないんですものね。あたしが好きな真ちゃんは今のままの真ちゃんで、別に過去の真ちゃんでもな

んでもないんだって考えるようになったの。

過去にどんなことがあったにしろ、そんなものは無関係なんだってね。そしたら急におかしくなって、それまで喉を通らなかりたごはんも急に食べられるようになったわ。でもね、その夜、確かにそれはそうなんだけど、急に真ちゃんて人が何かこうあたしなんかには手のとどかない人のよ　うに思えてきたの。だってあんな過去がありながら真ちゃんは今まで少しもそんなことおくびにも出さなかりたし、いつも明るく頼もしかったわ。それだけにかえって、そうかえって何だか、真ちゃんて人が大きなものに見えてきたの。あたしが今まで理解し手の中につかんだと思っていた真ちやんが急にあたしの指の間をすり抜けて高い所へ飛んでいってしまったの。すると今まであたしがしっかり握っていたと思っていた真ちゃんて一体何だったのだらう。それは本当の真ちゃんじゃなかったのではないだろうかって思ったら、そしたら急にこわくなってきたわ。

真ちゃんのことあたしは愛していた。でも今まで愛していた真ちゃんは本当の真ちゃんではなく、別な真ちゃんのような気がして来たの。あたし分らなくなってきたわ。あたしの指の間をすり抜けていってしまつた真ちやん、あたしには手がとどきそうもない高い所にいる真ちゃんをこれからも愛していけるかどうか分らないのよ。あたし、だから考えたいの。もっと、もっと自分の心にきいてみたかったの。だから、一ケ月なんて言ったんだわ。

真　一　分ったよ。俺が悪かったな。でも俺はよっちんが思っている程高い所になんかいないよ。

よしえ　ええ、そうかもしれないわ。だからそのことも考えてみたいの。

真　一　で、一ケ月たってどうしても俺のことを愛せなかったら、別れるっていうの？

よしえ　しかたがないわ。どんなに好きでも人にはそれ相応の相手がいると思うのよ。

真　一　それが、そうできるの？

よしえ　(はつとして)真ちゃん、あなたは一体どうなの。あなたは……。あなたはどうしてもっとあたしを強くだきしめておこうとしないの、好きだったら。今度だってそうだわ、健ちゃんからあんなこと聞いて一週簡もの間、どうしてあたしに電話をくれるなり、家に会いに来てくれるなりしてくれなかったの。その間、あたしは考え迷いながらどれ程あなたが来るのを侍っていたか、あなたには分らないの。一ケ月会わないってことだってそうよ、あたし、本当はね、ここに来るまでそのことを言おうか言うまいか迷っていたの。で、あたしは、あなたの出かたを見て言おうと決心したんだわ。

でも、とうとうあなたはあたしに言わせてしまったわね。いえ言った後でも、もし真ちゃんが本当にあたしを好きなら思いきりてなぐってくれてもよかったのよ、そして思いきりだきしめて離さないって言ってもらいたかった。

真　一　（苦しそうに）出来ないんだよ、俺にはそんなことが…。

よしえ　どうしてなの、ね真ちゃん。あなたもっと自信を持ってもいいんじゃない。あなたとあたしは他人じゃないのよ。あなたは自信を持ってあたしに対してもいいはずよ。あたし、そんな強さと自信をあなたに持ってもらいたいのよ。

真　一　俺、こんなことよっちんに言わせてしまってもう駄目だね、おしまいだね。

よしえ　真ちゃん……。

二人黙り込む。やがてよしえすすり泣き始める。

しばらくの間。

ドアの外で管理人　森村さん、森村さん、電話ですよ、病院から。

真　一　はい……病院？どうしたんだろ一体？

よしえ　もしかしたら、健ちゃん……。

真　一　馬鹿な、とにかく行ってみる。

真一出て行く。後によしえ残される。おちつかないよしえ。

数分後真一が入って来る。取りみだしている様子。

よしえ　どうしたの真ちゃん。

真　一　健二のやつ……（坐り込んでしまう）

よしえ　真ちゃん、ね、健ちゃんがどうしたの？何か……。

真　一　車にはねられて病院に……。

よしえ　で、けがは？

真　一　うん、大したことはないらしい、なんでも足を折っただけで済んだらしい。

よしえ　まあ！

真　一　こんなことがいつかは来ると思っていたんだ。あの野郎め、大丈夫だ心配かけないなんていっておきながら、これだ。無茶だったんだ、土台な。

真一頭をかかえ込む。

よしえ　真ちゃん！とにかく病院へ！
真　一　いいんだ！放っておけ！
よしえ　まあ、真ちゃん！（坐り込む）
真　一　あいつ、自分でやるなんて言っておきながら、あいつ、ちきしょう健二のやつ。
よしえ　……。
真　一　馬鹿だよ、あいつは、健二、お前は馬鹿だよ、
よしえ　あたし行ってみる！病院に行ってみる！健ちゃんのところへ。
真　一　よしてくれ！同情なんぞまっぴらだ。俺には我慢ができないんだよ。一段高い所に上って哀れみの手をさし出す。自分はそのままの少しも傷ついていないくせに、さも悲しいような顔つきでね。甘ったるい、少女趣味のセンチメンタルなんかまっぴらだよ。分ってたまるもんか、他人な　んかに。関係ないんだ、よっちんには。
よしえ　真ちゃん！どうしてそんな……。あなたには分らないの、ねえ真ちゃん。関係ないなんて、ああ、真ちゃん……。

よしえ、すすり泣き出す。
真一、ちょっと彼女をみるが、すぐ目をそらし黙って考え込む。
急激に暗くなって真一のみが光の輪の中に浮き出される。
真一の回想。
激しい吹雪の音。舞台の真一は黙ったまま。
第一の回想は少年の頃。
声のみ。

健　二　兄ちゃん、寒い。
真　一　がまんしな。またあのわら小屋に行こう。それまでな。
健　二　いやだ兄ちゃん。また見つかってなぐられる。
真　一　だってしょうがないだろ。他に行くところがないもの。この前はお前が泣き出したから見つかったんだぞ。黙って静かにしていれば見つからないよ。
健　二　いやだよ、ねえ兄ちゃん。もう帰ろうよ。ねえ、お腹へったよぉ。
真　一　きっとまだいるぜ、あいつ。それでもいいのか？
健　二　……。

真　一　それみろ、だったらしょうがないじゃないか。もうじき帰るさ、あいつ。

健　二　もうみんな寝てるね。

真　一　ああ、もうじき十一時だろ、寝てるよ、こたつかあんかに入ってな。

健　二　兄ちゃんあいつ憎くらしいね。

真　一　まあな。

健　二　あいつの子供、友行っていう奴ね、俺のことといじめるんだ。昨日なんか雪の中にうずめられたよ、兄ちゃん。

真　一　我慢するんだ、我慢な。苦しくても、悲しくてもじっと我慢するんだ、今は。

吹雪の音消えて、第二の回想に移る。

健二から真一にあてられた手紙である。

健二　兄さん、ごぶさたしました。相変らず、お元気のことと思います。僕もまあなんとか病気にもならないで元気です。あと半年で卒業です。今はもうそれだけが唯一の希望になっています。兄さんのいる東京での新しい生活、その日が一日でも早く来るのを毎日待ち望んでいます。

母さんは相変らずで家は全く静かです。僕らはもう生活に必要なぎりぎりの会話しか交しません。こんな親子はよその人から見たらずい分おかしいことでしょうが、僕にはもうすっかり身につきかえって今の状態が自然なんだとさえ思っています。兄さんがいつか親子さえ他人だって言いましたね。今の僕も本当にそう思います。親子なんだなどと思っていた時には言えなかったことも、今はかえって何気なく言えます。これは悲しむべきことなのでしょうか。僕には分りません。

兄さん、僕は時々母さんが泣いているのを見ます。でももう僕にはどうすることも出来ません。かえってそんな母さんを忘れたくなります。一刻も早く東京へ、いや東京というより兄さんの傍へ行きたい思いです。僕が少しの警戒もなく裸のままでいられるのはもう兄さんの前しかありません。兄さん、また兄弟だって他人さなんて言わないで下さい。そんなことを兄さんから言われる恐しく、不安になってしまうのです。僕にとって兄さんは、他の誰よりも頼りになり、安心していられる人なのです。どうかいつまでも僕を見捨てないで下さい。

では兄さんもお手紙下さい。さよなら。

舞台は明るくなる。

真一、やがて決心したように立ち上る。その顔は明るい。

真　一　俺、病院に行く。（よしえの肩に手をおき）来てくれるね、一緒に。
よしえ　（喜びの微笑の中で）真ちゃん！
二人念いで部屋を出ていく。

〈溶暗〉

時間の経過を表わす音楽。

〈溶明〉

その夜。
真一とよしえ、部屋に入って来る。二人はすっかり明るい。
真　一　健二のやつぶざまなかっこうしていやがったね、あいつめ。（笑う）
よしえ　笑いごとじゃないわよ。
真　一　でも良かったな、大したことがなくて。どんなけがかと心配したよ。
よしえ　本当ね。
真　一　健二のやつ、兄さんすまん、あやまっていたな。もっと病人らしくうんうんうなってりゃいいのにな。もっとも足一本折れただけだものな。その位でへこたれるような奴じゃないよ、奴は。
よしえ　大丈夫なの、真ちゃん。
真　一　何が？
よしえ　だって、ようし俺にまかせろ、お前は心配したり変なこと考えたりしないで早く足を直して新聞配達やれ、なんて。
真　一　ああ、こうなったらな、めんどうみてやるよ。二人きりだものな。
よしえ　あたしは？
真　一　ここにもいたか、もう一人。ようし三人だ。たのむよ、なよっちんも。
よしえ　もちよ。まかしといて。
真　一　でもちょっと困ったな。

よしえ　何が？

真　一　うん、あれ、明らかに健二の奴が、悪いわけだろ、信号が赤だったんだから。賠償金なんてほとんど取れないんだろ。奴の入院費とか、何とか、かかるだろ。

よしえ　そんなの、あたし達の貯金を使えばいいわ。

真　一　だってあれは……。そうか、ありがとうよっちん、恩に着るよ。

よしえ　何を言うの、あたしはあなたの何なの？

真　一　何だっけ？

よしえ　知らない！真の馬鹿。

真　一　でもよっちんは俺から離れていくんじゃなかった？

よしえ　考え直したわ。だってあたしがいなけりゃ真ちゃんやっていけそうもないものね。ずうっといてあげるわ。

真　一　何をこいつ、おしかけ女房か、うんそれも悪くないな。でもどうするんだい俺達の結婚式は。

よしえ　あきらめたわ。いいわよ。あんな形式だけの結婚式なんか。式なんてよりも、結局二人の問題よ、ねえ真ちゃん。

真　一　悪いなあ。夢をうばっちゃって。

よしえ　いいのよ、そんなこと。それよりあたし今晩泊っていこうかな？

真　一　（あわてて）おい、よせよ。馬鹿だなあ、よっちんは。

よしえ　だって……。

真　一　いいかち、俺がちゃんと家まで送っていってやるよ。

そうだ、よっちん、じゃ健二が退院して全決したらその時、俺達結婚しよう。大げさな式なんてやれないだろうけど、友達とささやかでもいいからやろうじゃないか。いいかい？

よしえ　真ちゃん！いいわ。

真　一　ようし決った。

よしえ　でもあたしを食べさせて行ける？

真　一　何を言うか、働くんだぞ、よっちんもな。二人で一緒に働くんだ。せっせとね。

よしえ　へへえ、しかたがない。そうするわ。でも真ちゃん。あたしだけに食事の用意やお洗濯、それにお掃除をさせないでね。

真　一　ああいいとも。奥さんを大事に大事にしてやるよ。

よしえ　きっとよ。

真　一　まかしておけ。

よしえ　真ちやん、あたし真ちゃん大好き！

真　一　俺もよっちん大好きだ。さあ、これから俺達の出発だ！

二人近づいて激しく抱擁する。

《幕》

小説

二人だけで愛しあおう

昭和40年（1965）　24歳作品

昼休み時間、わたしは机の上に拡げた週刊誌の面にはまだとどいていない空間に視点を止めたまま、レンズの焦点を思いきってずらせた幻燈の投影を見ているような、輪郭の定かでない赤や黄や緑などの色彩を意識の底にぼんやり感じながら座っていた。といって別に考えごとをしていたわけでもない。食堂で昼食をとった後、職場の自分の机に戻ったわたしは、つい先刻まで確かに初秋のモード特集を見ていたのだ。そして、いつの間にか、これはいつものことだが、それらのカラー写真は無意識のうちに四次元の果に追いやられてしまっている。わたしはこのもはや習慣的にさえなっている状態から覚醒した直後に感ずる、白々しい程の空しさに、軽いおののきさえ感じていたが、この深い霧の中に放り出されたような状態が至上命令か何かのように襲ってきて、わたしはいつもその中に身動きできない自分を感じるのだった。

わたしの事務机の上には、更に仕事のための必需品であるインク壷やペン軸、クリップやピンなどを入れた筆箱、墨色の電話器などが置かれているはずだ。見ようと思えば見られるそれらのものも、今のわたしはあらためて見ようとは思わない。だが、わたしはそれらのありかを身体が熟知しているのを知っている。しかし、今それが一体何になろう。その内に昼休み時間も終るだろう。その時になって仕事のために身体の機能が自然にそれらを必要とするはずだ。

昼休み時間は終りかけている。わたしを取りまく霧の外から、その時間が段々侵触し始め、わたしまで到着した時に午後の勤務は始まる。それはいとわしいものでも、かといって楽しいものでもない。わたしは、ただ無抵抗に時の流れの中に身を投げ出しておくしかない。

突然、机上の電話が鳴った。

「はい」

伸ばした左腕が、ほとんど自然に受話器を取り上げている。勤務時間中なら習慣的に「○○課です」といっているはずの声は、何故か出てこない。

「誰？君は？」

そんな無作法な相手に憤りを感じてもいいはずのわたしだが、今はそんなことなどどうでもいい。わたしはまだ霧の中にいる。

「私、Yです、が……」

「やっぱり！僕はG、知ってる？」

「G、さん？知らないわ」

「そう、いいんだ。気にしなくっても。僕ね、さっき食堂で始めてあなたに会ったんだ。それで、あなたを知っている友人から聞いて電話しているわけ」

「何て聞いたの？」

「名前と職場だけさ、だってそれ以外に知る必要もないしね。ね、僕と恋愛しない？」
「え！レンアイ？」
「うん恋愛。コイのアイね」
　わたしはいつの間にか立ち上っている。恋愛という言葉の響きが、どうやらわたしを霧の中から引張り出したようだ。そのわたしの急に明確に働きだした視線が、机の前の床の上に落ちている一本のクリップをとらえた。すると何故か急に動揺し始めた。
「ちょっと待って下さい……」
　受話器を机の上に置いて、ゆっくり机の端をまわると、まだ手をつけていないコーヒーの表面から糸屑でもつまみ上げるように、床の上からクリップをそって拾い上げ、大事そうに筆箱の中に戻した。予期したように、わたしの動揺はおさまっている。そして、またゆっくり席に戻る。
「それで、その、恋愛の話ね、私は別に構わないんだけれど、どうしてそんな気になったのかしら？」
「どうして？そんなこと全然問題じゃないね」
　彼、確かGといった、は確信的に断言した。
「そうね、それもそうだわ」
「そうだよ。僕らにとって問題にすべきことは、これからいかに愛しあうかってことだけだよ」
「うん、判るつもりよ。つまり私があなたをまだ知っていない。あなたも今日、始めて私に会ったということは、これから恋愛を始めていく上に、何ら支障ないわけね」
「その通りだよ。なまじ相手を知っているということは、僕らに偏見を持たせ、僕らの恋愛の純粋さを歪めるだけで、何の役にも立たないんだ。だから僕は白紙のままで相手に臨み、相手もまた白紙のままで対してくれるということが、僕の理想であり、ぜひとも実行しなければならない掟でもあるわけだよ」

　その後、ぼくはYに会う場所と時間を指定した。彼女はそこに、ほとんど一分もたがわず現われるだろう。それは充分に確信の持てる考えだ。
　電話を切った。そして、ぼくは机の上に拡げてある小説に目を落すと、先刻の続きに何の抵抗もなく入っていける。
　やがて、昼休みの終りを告げるチャイムが鳴ると、勢い本を閉じ、それを机の引出しの中に放り込むと立ち上がった。そしてその瞬間に、ぼくは午後からやるべき仕事を思い出し、その手順を考える。そして、時間の割りふりをして、その計画に従って、夢中で肉体を酷使し、頭脳を急回転させる。そして、仕事が終る頃に、それらは秩序だてられて処理されるのだ。それに対して、入社四年目のぼ

くは何の喜びも満足も感じないが、こんな仕事を追って、それに夢中になれることが、まあいわば会社生活では唯一の救いなのだ。

「あれねえ、あのこの前の薬ねえ、あれは良かったですよ。強くなくて、だんだん効いていくんですよ。わかるんです。少しずつ身体があの薬を吸収していくのがねえ、あれは優しいんですねえ。優しく効いていく薬なんですねえ。本当に良薬ですねえ、あれは……」

男は閉ざされた薬局の鎧戸の普通の新聞受けなどより大きくなっている小窓から、明るい店内に顔を向けている。中窓が作る明るい方形の上端が男の丁度額のあたりを斜めに横切り、その下の顔は心なしか青白く見える。薬局の中でも、何かいっているようだが、それは聞き取ることができない。ただもの憂げな、変に引き伸ばす特徴のある男の言葉を、ぼくは意味もなく聞いている。

黄昏時から蓄積された夜の重さがずっしりと覆い、この郊外の街を黙り込ませている。もう街灯も必要ないと思う。ちかんも若い女ももう眠っている頃だろう。今時分起きているのは、天井に空ろな目を向けて死に近づく自分を感じて、自分の息さえもおしころし他人に覚られまいとする病人か、あるいは時たま思い出したように激しく愛し合う愛人達か、ほとんど絶望的な受験生だけかもしれない。互い違いに道の両端に輝く水銀灯は狭い道路に添った店や家々の外界を拒否する戸口を鋭く刺している。嫉妬という言葉は、馬鹿な人間のそれを証明するだけの感情を表わす他に、こんな真夜中の街灯の光も表わすものだと、ぼくには思われる。

ぼくは道の真中を、頑なに両端の商店や家々を無視して歩いているうちに、ふと、あるおかしさに衝られる。こんな夜の、誰もいないアスファルトの道を、鋲を打った靴を履いて歩いて行く自分は、まるで映画のラストシーンの主人公みたいだと思う。あいにく、ぼくの靴底は合成樹脂で出来ていて、鋲が打ってなかった。だからぼくは野良猫のようにしか歩けないわけだ。

映画はどんな内容のものだろう。メロドラマでも殺し屋の出てくるものでも、退屈な老人の哀歓云々という芸術映画でも、空々しいコメディでも、このラストシーンは使えるだろう。しかし、少なくてもそれは現代劇でなければならないだろうが。

「要するに、この主人公たる僕の容貌、服装、顔や身体の表情、それらがおのずと前に展開されたドラマの内容を決めるというものだ」

ぼくが相手を認める役割なので、約束の時間より少し早めにその喫茶店に行ってなければならなかった。入口に近い席を取ると、紫色の厚い板ガラスで出来ていて、暗い店内からはまだ明るい外が見られるドアに目を注いでいた。ぼくの座っている場所から、そのドアを通して見ることができる外界の範囲はごく限ら

れていたが、それがかえってその狭い枠内にに入った人の動作や表情が活々と観察できるのかも知れない。
　まるですぐにも別離が訪れ、それから逃れでもするように焦りさえ含んだ執容さで愛を確認したがるような、身体を寄せ合って危かしい足どりで入ってくる愛人達や、外観は若々しい朗らかさと明るさを認められるが、一人一人がその瞳の底に退屈さと欲求不満とが見られる男女のグループが入ってくるのを、ぼくはこの喫茶店に来た目的を忘れてしまうほど、あきずに眺め続けている。
　ぼくが信んじていた通り、約束の時間かっきり、Yがその入口まで、確かにぼくではない男と腕を組んだ恋人同志気取りで現われた。Yの頭を男の肩のあたりにおいたまま。ぼくはそんなYと男の様子に妙にこだわり始めた。そんな格好は歩きながら取るべきものではないと思う。男が足を運ぶ度に、女の頭は男の肩のごつい骨の上で踊るはずだし、そうしないためには男は人間の能力ぎりぎりに静かに歩かなければならないだろう。また交通事故に遭遇しないために、女は自分の頭の痛みに甘んじなければならないわけだ。しかし、とにかく彼女らは、つい先刻入ってきた愛人達のような雰囲気を持っていた。

　だがYは、入口でその男とあっさり別れてしまった。軽く上げた指の白さが、紫の板ガラスを通しても、なおも白く認められる。Yはしばらくの間、そのドアによって区切られた枠からはみ出した男の姿を追っていたらしく、その方を向いて立たずんでいた。やがてドアを身体ごと押す。そして中に入ってきて足を止めた。つまりYはぼくの顔をまだ知っていないのだ。ぼくは落着きはらって、ゆっくりとあたりを見まわす。テーブルを一人で占めている若い男は、ぼくの他に四、五人いるようだ。その時衝られた無邪気ないたずら心は、入口の辺りまでYが男と一緒に来たことへの報復では断じてなかった。ぼくはただ好奇心がさせた業だと言い切れる。Yがどこへ行くか、Yがどんな風にしてぼくの所に来るか、また、そのまま帰ってしまうか、それはギャンブルにも似た興味だった。Yは見てくれの良い青年の前に行き「Gさんでしょうか」というか、あるいは難かしそうな本を拡げて読むふりをしている青年の脇に坐って「Gさん?」と尋ねるか、ぼくは後で報告書を作成しなければならない時のような真剣さで観察し始めていた。
　Yにとっては、ぼくでなければならない、という絶対的な制約はないはずだ。おそらくこれからぼくとYが愛し始めたとしても、そんな制約は不要だろう。Yはまだ入口で立っている。傍のレジの女が怪訝そうに見て、何か声を掛けたようだが、Yはちょっとその女を見たきり、また店内をゆったり見まわし続ける。その内、そのYの視線がぼくに突き刺ってきた。少し狼狽し始めていたぼくは、それを無表情に見返してやる他はなかった。しかし、すくそれは隣りの青年に移っていった。

やがてYはぼくを呼び出してもらうことを決めたらしく、しばらく後に、音楽とハーモナイズするぼくの名前が店内に流れた。ぼくはほとんど満足していた。ぼくはゆっくり店内を見回わす。と、斜め後の席で、音楽を聴いていたのだろう青年が、その途中のぼくの名前(もっともその青年は、それが彼を見つめているぼくのものだとは判らない　はずだが)によって、現実にひきもどされたせいか、不快そうに舌うちするのを、ぼくは楽しいものでも見つけ出した時のように、笑顔をつくる。そして、顔をYに向け直したぼくは、彼女の傍に誰も行かないのを、半ば不思議そうに見つめてやる。やがてYはくるりと向きを変えると、店内から外へ出ていった。愉快だった。おそらくこのことで、Yはぼくに始めて会おうとしたことを後悔はしていないと思う。たとえ、ぼくがこの喫茶店にいなかったとしても、ここに来て、ぼくをさがす緊張した気持が、Yにとって一時の生きがいににっていただろうから。

ぼくもすぐそこを出て、まだ遠くない道路の片側を、子供が始めてお使いに出た時のようなしぐさで、バッグを振って歩いていくYのあとを、急いで追った。

「Yさん！Gです」

やっと追いついたぼくは、息せき切って声をかける。

「あら！」

ぼくを見たYの瞳の中に驚きを見つける。そして、それが憤りを含んだものに変わり、やがてまぶしそうにぼくを見つめ出している。それはほんの一瞬の変化だったが、いつも初対面の女性に見せるぼくの最も魅力的だと自分自身信んじている笑顔のもとで、ぼくは詳細にYを観察していたので、見逃しはしなかった。

「メロドラマのラストシーンはこうだ」

ぼくは片手をズボンのポケットに入れて、少しうつむきがちに歩き始める。前に出す一足一足が悲しみを深くしていくような歩き方だ。そして、時折りもうそれ以上耐られなくなったように立ち止まると、ふり返って、まだ、ぼく(メロドラマの主人公の)を見つめて立たずんでいる恋人を遠く見つめてため息をつく。

「ああ、彼女の方になら飛ぶように行くだろうこの足が、彼女から離れていく方には、どうしてこんなに重いのだ」

ぼくがつぶやくと、思い切るように身をひるがえして歩いていく。そのぼくの頬には、涙が二筋の道をつくっているはずだ。だが実際のぼくにはそんなものはなく、そんな気分にひたり切っているだけだ。ぼくの足は急ぎ足になる。そして、もう決して後を振り返るまいと決心する。だが、百メートルもその急ぎ足が続くと、ぼくはがっくり歩調を落す。

ぼくは今だかつて芝居をやったことはなかったが、ひたすら主人公になりきっていたので、きっと名演技だったと信んずることが出来た。ぼくはカーテンコー

ルの時の演技者の顔を思い出してそれを真似た。
「さあ、今度は殺し屋だ」
急にぼくは緊張する。そして背広の内ポケットが重く感じ始める。そこに黒光りする拳銃が入っているのだ。コルト・オートマチックがいいな、とふと思う。そして、ぼくの頭には黒いソフト帽が、目深かに載っているわけだ。殺し屋の歩き方はこうだ、とぼくは昔の剣の達人のような用心深さで、足を運ぶ。それは前に出した足をスプリングにして、横にすっ飛ぶか、路上をすぐにでも転がれるように歩き方だ。そしてぼくは急に立ち止る。急いで右手を背広の内ポケットに入れ、両足を軽く開いて傍の家と家の間の暗がりをきっとにらむ。そして、歪めた笑顔をつくり、口先だけでふっふっふっ……と笑わなければならない。敵はもちろん現われて来はしない。ぼく、殺し屋に変身したぼくは、再びゆっくり歩き出す。カメラの位置が次第に高くなり、ぼくの後姿は小さくなる。ジ・エンド。
ぼくは歓喜の笑声を上げる。実に爽快な気分だった。笑い続けながら、スキップを踏んで駅に向う。

ぼくとYは、最初の喫茶店にもどろうとしたが、そこの入口のドアの色が気に入らないといういう意見の一致をみたので、そこからはほど遠くない喫茶店の同伴席にいた。真面目な地方の高校生だったぼくは、上京したばかりの頃、喫茶店に誘う先輩の言葉に、おどおどして、妙に後めたいものを感じたものだったが、今はどうだろう。こんな抱き合って口づけを交している愛人達の中でも、平然としていられるのは、ボクが一人前になりきったからかもしれない。
ボーイが注文を聞いて引き下った後、ぼくはタバコケースを取り出し、一本を口にくわえYに顔を向ける。

「どうですか、あなたも……」
「それ、何？」
「いこい」
「じゃだめ、ハイライトなら、いいんだけど」
「持ってますよ、ハイライトなら……」

Gは今度は反対側の内ポケットから、まだ封の切っていないハイライトを取り出すと、わたしは狼狽した。まだタバコなど一度も喫ったことのないわたしは、その場をつくろうために、おそらくGの持っていないだろうタバコの銘柄を言ったに過ぎなかったが、もう、今更あとへは引けない。わたしは決心した。
「じゃ、一本」
おそるおそるくわえたタバコの先端にGは慣れた手つきで火をつけてくれる。と突然、煙の洪水がわたしの胸を襲った。始めてのわたしは、まるで深呼吸でも

するように吸い込んだのがいけなかったのだろう。激しくむせりながら、上目づかいにGを見ると、彼はこんなわたしをただ微笑して見ている。何ということだ。少しは同情してくれるべきだ、とわたしがGだったら、やはり彼と同じ態度を取るだろうことを意識しながらも思った。それで、わたしは一生懸命タバコを吸う練習を始め出すと、いつもの癖ですぐ夢中になり出した。大胆に鼻から煙を出してみた。鼻の奥がツーンと痛む、そしてむせる。だが、実際に面白いものだ。今度はくわえ方の研究だ。だが、その前にGに言訳けしておこう。

「私ね、本当を言うと始めてなの、タバコは」

Gはただ笑ってタバコを吸っているだけ。ふとわたしは、小さな後悔を感じた。そんなことはGには関わりのないことなのだ。わたしはハンドバッグから鏡を取り出し、わたしの口もとを見つめる。真中辺にくわえてみたり、傍にくわえてみたりするが、どれが一番美しい形なのか見当がつかない。持ち方もいろいろ変えてみる。それでも、どうにか手を伸ばしきって、人差指と中指にそっとはさむ持ち方と、何げなく口の真中より少し片側に寄りぎみの辺りにくわえ、ただ、煙を口に含むだけで吐き出す方法が、一番自然だという結論を得たが、もっと検討してみる必要がありそうだ。さっそく今夜から始めてみよう。

一本のタバコに弄ばれた後、頭痛がしてきた。だがこんな頭痛は時折感ずるものと変わりなく、たいしたことではない。頭痛すらわたしにとっては、そのことだけで夢中になれるということで好いている。

「僕ら、これから恋愛を始めるわけだけど、まず、その宣誓をやろう」

Gは真面目な様子でわたしを見つめる。

「そんな必要はあって？」

「あるさ！オリンピックだってやるだろ」

わたしは思わず吹き出したが、Gは真面目ぶり続ける。

「で、どうすればいいの」

わたしは段々、Gに強い興味をおぼえ始めていた。今はでわたしの相手だった恋人はそれぞれ異っていたが、ある面では似かよっていた。ことすら、わたしを立ててくれたということで。だが、あるいはこれはGにとって目的は同じのひとつの方法かもしれない。

「まず、こうやって二人は握手する」

Gはわたしの手を握った。柔らかく暖い手だった。

「そして宣誓する。君はこうだ。『私はあなたを愛しています。だから、これから私はあなたと恋愛します』分った？いいね！さあ」

「私は、あなたを愛して、います。だから、これから、私は、あなたと恋愛します」

すっかり楽しくなったわたしは、熱を込めて言った。

「僕も君を愛している。だから、君と恋愛をする」
Gもまたひどく意気込んで断言した。しかし、わたしはこの宣言が少し気にかかるのを感じる。まだGを愛してはいないのだ。といって「愛」という甘美な響きを持ったこの言葉の定義をまだ理解していないばかりか、その存在さえ知らない。だからといって、わたしはそれを追求するためにGと恋愛を始めるわけでもないのだ。
「これで終りね？」
「いや、この後、僕らは接吻するんだ！」
わたしの視野に大きくGの顔が入ってきた。わたしは目を見開いたままそれを待つ。やがてGの瞳が一つになり、鼻が触れ合うと同時に、Gの唇を感じた。さして意味もないこの行為が済むと、大きく深呼吸をした後に、Gは言った。
「さあ！これでいい。僕らはもう恋人同志なんだ」
朗らかなGの言葉は、わたしを一層愉快にさせる。わたしは笑い出す。Gもつられて笑いながら、片腕を後にまわし、わたしの肩を抱いた。これが恋なのか。
「僕、君はこれで六人目の恋人。君は？」
「九人目よ、確か。あなたで」
「すごいね！いいなあ！」
Gは羨ましそうに見つめる。それは収集家が彼よりも多く収集している者への単純な羨望の念でしかないことを、わたしの体験が自信を持たせてくれる。Gの二人前にあたる恋人は、これで十人目だと自慢するように言った後に、その記念として豪華に奢ってくれたものだった。ほとんど始めてといっていい高級なレストランで、テーブルに向い合わせに座り、運ばれてくる料理を待ちながら、狂おしいほどにその男を羨んだものだ。

「それじゃ、初恋の話をしようか」
「興味ないわ、そんなの」
「どうして？楽しいもんだよ」
「いやなの、今の私がそのためにこうなったと人に解釈され、自分でそれを認めそうになるのが……。本当は、そんなんだろうけど」
「いまの私だって！おかしな言い方をするんだね。まるで君が、他の人と全く別な人間のようなそんな言い方はよくないね。もしも、たとえ君や僕が他の多くの人と別なものであっても、その原因は君の初恋の人のせいじゃ ないと思う」
「そうかしら？」
「そうさ、僕らの世代の現在の状態、それはひとつの些細な原因によって決められたものじゃないんだ。もし、原因があるとしたら、それは歴史そのものなんだ。そして、僕らの世代にとって、今の状態が極く自然なもので、少しも異常なものではないんだ。あるいは僕らの次の世代の生き方は、僕らとは違ったものに

なるかもしれない。だけど、僕らにはこんな生き方が必然的なんだと思う」
　それはこじつけだ、とあやうく言いそうなになった。まわりには同じ世代の人達でわたしとは全く異った生き方をしている人も多くいるもの。それに少しも疑問を持たないでいる人達が。そして、わたしはもしあの時、Mと会わなかったら、そんな今の自分のようでない人と同じように生きただろう可能性をわたしの中に見い出しているのだ。そうなのだ、いまのわたしは、Mのせいであり、Mから出発した状態なのだ。わたしは黙り込む。
「じゃ、僕から話そうか、初恋の話を」
　わたしはうなづく。まるで意味のない過去の話、それはわたし達の生活そのものが意味のないもので、それがかえって意味があるように思い込んでいるところから出ているだろうそれを、西洋の小説でも読むように聞けばいいのかもしれない。

「じゃ、始めよう。僕の初恋は、もうずっと前のことなんだ」

　ぼくはおとぎ話でも話し出すような気になり始める。そうなのだ、ぼくにとっては何度か新しい恋人に話したこの話はおとぎ話なのだ。過去にほんの少しあったことを、歪め、再編成し、虚偽を入れることにより、ぼく自身に夢を呼ぶおとぎ話になっている。だからぼくはこの話をするときは、ほとんど陶酔している。
「Gという青年は、子供の頃に両親を失いました。父親を戦争で、母親をその過労からくる肺炎で。それで彼は、その母親の弟に、つまり叔父にあたる人に育てられることになったのです。東北の片田舎で貧しく農業を営む叔父夫妻は、充分に彼を愛してくれましたが、その愛を受けとめられる程に幼くはなく、自分の立場を真に理解する程には成長していなかったので、彼は毎日のように彼の母親のことばかり思い出していました。叔母は、その地方の女らしい素朴でしたが、それは無神経だということの善意に解釈に過ぎませんでした。

　こんなことがありました。ある日、学校が終ると、彼はいつものように他の同級生のように急いで家に帰ろうとはせずに、ゆっくりと田んぼの畔道を家に向っていました。その途中、彼は草むらの中で泣いているまだ小さな猫を見つけたのです。茶色いぶちの猫で、抱き上げて顔を近づけると、顔をなめるのです。彼は弁当に残しておいたごはんをカバンから出して、その猫に与えると夢中で食べ始めました。やがて彼が帰りかけると、もうすっかりなついた小猫は、彼の足に体をすり寄せてきます。それで彼は家に連れて帰ることを決めました。家に帰ってからも、小猫と遊び続け、それは野良から叔母達が帰るまで夢中になっていました。小猫を見つけた叔母は、彼を家の子供とへだてなく叱りつけました。つまり、ごはんを食べる、ふとんにそそうをする、柱に爪あとをつける、障子を破る、大きくなったら子を産む、あらゆる猫族の人間にとっては不都合なことを理

由に。それでも彼は、しっかりとその小猫を抱いて離しませんでした。夜、食事もしないでふとんの中に入った彼は、その小猫を抱き続けました。しかし、朝になるとその子猫は、もう彼の腕の中にはいませんでした。そして、家の中にも、家のまわりにも。彼はさがしても見つからないのを知ると、家を飛び出し、学校へも行かずに子猫を見つけた田んぼの畔道に所に行って泣き続けたのです。こんなことがあってから、彼はますます自分の中にとじこもり、母親との会話だけをするようになったのです。そして、叔母を憎み出しさえしたのです」

「次は老人向け芸術映画の主人公だ」

ぼくは急に立ち止り、それから老人のように歩き出す。それまで、ぼくはゆっくの老人の歩きぶりを観察したことはなかったが、老人の心情を理解し、肉体的条件を考慮すれば演じられるという自信があった。それは初歩の演技者の方弁に過ぎないものかもしれないが、いまのぼくは何の商業的価値をも有していないということが、そのぼくに対して寛大になれる。六十才の老人はこうだ。ぼくはつい先刻まで屋台のおでん屋で、一ぱいひっかけてきたような気持に自分を駆り立てる。定年をすぐにひかえ、妻を亡った平凡なサラリーマンの老人。そして、その日嫁いでいった一人娘のことを思い出しながら、寂しく、ほっとしたように、冷酒を一息にあおったような彼になり切ろう。時折、ため息をつかなければならない。そして、抗うすべもなく肩をすぼめ、ゆっくりゆっくり歩いていく。遠くで電車の警笛を哀れっぽく聞き、急にせき込む。

「ああ、娘は、もう行ってしまった……」

消え入りそうな声でつぶやく。

ふと、二十二才の本当のぼくまでが寂しくなっていくのを感じる。六十才の老人と何の関連性もないはずの自分が、こんな気持になるのは実際おかしなことだ。あるいはぼくの演技力のせいかもしれないが、それにしてもこの寂しさ、それは明らかに老人の持つそれに酷似しているように思う。こんな中で、ぼくは自分の中で許し難い嫌悪の対象であった老人に同情すら感じている。それがあるいは、自分に対する同情かもしれないという意識の中で……。

明りのついている家も、もはやなくなっている。水銀灯がアスファルトの道路を冷たく照らしている。昼のはなやかな通りを想像できるだけにそれがぼくにはやりきれない。

それからぼくはコメディの主人公を演じる。

現在に生きるには、道化者にならなければならない青年の必然性を熟知しながら。そして、芸術という名を借りた商業主義の成人映画の主人公を演ずる。ますます歪められていく性にそんな一面のあることを惜しみながら。

その後、ぼくはそれらの行為にほとんど興味を感じなくなった。そして、再びぼ

くの心に重苦しくのしかかってくる思いを忘れるために、次の興味を引きそうな行為を思いつかなければならない。そうでなければ、一刻も早く眠りたいと思う。

「それからしばらくたったある日、学校から帰った彼はいつものように一人で畑に遊びに行きました。そして、かつて彼が母親とそうしたように、畑の境界の草むらの中から、もち草をつんでいました。その時には、もう食用にはならない程に堅くなったそれは、ただ一心に摘むということに、彼の亡った母親への、幼いせいいっぱいの愛の具現だったのです。しばらくして、その彼の頭の上で声がしました。ふり仰ぐとそこに彼の家の近所に住むおみねさんが立っていました。自分だけの秘密を知られてしまったことへの憤りを感じた彼はうつむいてしまいました。

　そのおみねさんは、一言も言わないでそんな彼の傍で、同じように何の役にも立たないもち草を摘み始めました。それをとがめるように見すえた彼の視線に、彼女は微笑で応えます。彼はやり場のない怒りを、再びそのもち草を摘むむという行為に没頭することで柔らげようとしました。そんな内、おみねさんの口唇から小さくもれる、その地方のわらべ歌に彼は敵意を失っていました。そのわらべ歌は、彼の母親がいつも彼に歌って聞かせたそれだったのです。

　彼はおみねさんと一緒に歌い出していました。笑えば、それに応じて微笑み返してくれる、あの張りのある愛に支えられながら、彼は失ったものを再び手にすることが出来た満足にひたれたのです。それを契機に、彼はおみねさんと話を交わすほどになりました。それからしばらくして、一方の手をおみねさんにしっかり握られ、一方の手にはわらで束ねたもち草をかかえながら、彼は夕焼け雲の下の彼の住む村に向っていたのです。

　そのおみねさんは、飲んだくれの父親とそまつな家に住んでいました。母親は既に亡なり、一人いた彼女の兄は家を飛び出し、行方が知れなかったのです。彼女の父親は働こうとせず、荒れ放題の田や畑は二十才そこらのおみねさんと親戚の人や近所の人の好意とに任せっきりでした。そんな彼女の父親を当然、人達は激しく罵りました。でも彼女は澄んだ大きな瞳に涙をいっぱいにためて、黙ってうつむくだけだったそうです。

　その日から、彼はおみねさんといつも一緒でした。前の日に、翌日の予定を聞きます。それは田んぼであったり、畑であったりしました。そして彼は学校から飛んで帰ると、おみねさんの所に駆けていくのでした。彼は小さな身体いっぱいにおみねさんを慕い、おみねさんから愛される喜びに夜も眠れないほどでした。

　そんな彼にとっては充実した日々が一年くらい続いたでしょうか。確か、あれはまだ陽の浅い春のことでした。その日も学校から飛んで帰った彼は、畑に行っているはずのおみねさんのもとへと行ったのですが、どこにも見当りません。そ

の辺りをさがしまわったあげく、裏切られたような思いで、おみねさんの家に行ってみました。

おみねさんは家にいました。でも、そのおみねさんは、それまでのつぎはぎだらけのかすりの着物ともんぺ姿の人ではなく、けばけばしい色彩の洋装の彼女でした。彼を見つめたおみねさんは、何かいいたそうな中で、寂しそうに微笑しました。そのいつもの顔の表情さえも違ったものに感じた彼は、突然不安にかられました。『どうしたの？おかしいや、ね、畑に行こうよ』じっと見すえる彼女の瞳は充血していました。『ずっと遠くへ行ってしまうの、もう坊やとは会えないわ』その意味を知った彼は、おみねさんの胸に飛び込んで行きました。『行っちゃだめだ、行っちゃいやだ』彼はおみねさんまでも奪おうとする何者かに抗うように、しっかりしがみついたまま泣き続けました。でも、彼はすぐ帰ってくるというおみねさんに、何度も何度も約束させて、しぶしぶおみねさんから離れました。

でも、それからおみねさんは戻っては来ませんでした。期待に始まる朝が、やがて失望に終る夜を、彼は何日過したでしょう。でも、そのうちに彼は、おみねさんを忘れるようになっていました。

おみねさんは、何でも、近所の大人達の言うことには、彼の村から汽車で四十分ばかり離れた進駐軍のいる街に、アメリカの兵隊さんの弄びものになるために行ったということです。

「これがGという青年の初恋の物語」

「あら、それは恋かしら？」

「そうさ、僕にとってはね」

ぼくはたまらなく愉しい。ぼくのおとぎ話に、更に一人の理解者ができ、それをまんまとあざむき通したぼく自身の話術の巧みさと、その構成の素晴しさに、また酔いしれることができるのだ。

「僕はね、その人のことを、まだはっきり記憶しているんだ」

「ふうん、そう」

もう興味を失ったようなYの態度は、実際，無理のないことだ。ぼくは別にYの同情を引こうなどと話しを始めたわけではなく、そうすることはどだい不可能に近いのだ。それはぼく自身についても言えるだろう。他人がどのような過去を持っているとしても、それは自分には何の関係もないことだ。

だから過去の話の真相などは、どうでもいいことなのだ。ぼくは、確かにおみねさんに求めるものは、一時の現在の忘却でしかないのだ。ぼくらは行為や会話のことを、時折思い出す。でもそれは、畑で働くおみねさんの姿ではなく、うす暗い中屋の中で淫らに拡げた白く痩せた肢を持った女としてのみねちゃん、みね公なのだ。彼女がぼくの前に現われたのは、確か、ぼくが中学二年の時だ。彼女

は父親と二人暮しだったが、父親は働きもので通っていたし、彼女は兄同様、手のおえない不良だった。そして、ぼくは彼女に、彼女の家の小屋で犯されたのだ。そして、それらのことがぼくの日常生活の習慣になりかけた頃、彼女もまた兄のように家を飛び出し、近くの街の怪し気なバーで働くようになったらしい。

それによって確かにぼくは、彼女とそうなる前のぼくよりも変った。だが、それらの事実が、現在のぼくを形成したと飛躍して断言することはできない。もし、そう断言したなら、ぼくだけが特別な青年だということを自認することだし、第一、それはぼくの信念、つまり、ぼくはぼくらの世代の中の特別な青年ではないと信じていることに反している。

「あなた、じゃあ孤児なのね」

Yは愉しそうに問う。ぼくは誇らしく応えよう。ある意味で真実の答えを。

「そうだよ」

ぼくには父親はいない。だが母親は健在で、近い将来、いまぼくがいるこの地に出てきて、一緒に暮らすことを夢みながら働いている。

ぼくは、駅に向って歩いている。そして、これはしごく当然のことだが、それに対して何の疑惑も感じない。確かに、ぼくが歩いているこの道は駅に向っていると思う。だが、果してこの道を進めば、駅にたどりつくのかどうかは、歩いているいまのぼくには判らない。いろいろな映画のラストーンを演じた後、ぼくはこれから何をしながら歩こう、何をして気を紛らわせようかと考えていたようだ。そしていま、そう考え、ぼくの頭がその何かをしている自分のイメージを追うことで充満していたのが、それ自身ぼくの気を紛らわすことに役立っていたのに気づく。だが、もうそう思うことも億劫だ。それでいてぼくは、自分の頭の中が空虚になるのを恐れている。

そんな内に、道端の街灯と街灯の間の短い、それでいて、ぼくの背たけよりも高い塀の上に、一匹の小猫を見つけた。小猫はそこから飛び降りるにはまだ幼さなすぎるらしい。恐らく捨猫なのだろう。ぼくを見つけたその小猫は、ぼくに向ってなき出す。せいいっぱい絶叫するように救いを求めるその哀れっぽいなき声を、ぼくは無視する。それでいて、ぼくは興味あり気に、わざとへいの傍に寄り、ゆっくりと歩き出す。小猫はなきながら、塀の上を、ぼくの歩調に合わせて移動する。ぼくは事実同情し、興味を感ずるのだが、かえって無頓着そうに放っておく。夜更けのこの道は、今夜はもうぼくの後に通る人がないかも知れない。しかし、それがぼくがその小猫を、塀から降さなければならないという理由にはならない。小猫はなき続ける。そして、ぼくはそこを離れた。ぼくに向ってなき続けているだろう小猫のなき声を後に聞きながら。

「さあ、今度は君の番だ」
「どうしょうかな、私、まだ迷っているの」
「もったいぶらないことだよ。僕らにとって、良くないことなんだ。過去にこだわることは」
「そうかもしれないわ……」

やはりわたしは話そう。かつてわたしとMとの間に起ったいきさつを。そして、これから新しい恋人にGのように気楽に話せるようになるために。
「じゃ話すわ。二年前のことだわ。高校を卒業すると私は都心にあるS商事に勤め出したの。その頃の私は、今から考えると、どうかしていたと思われるほどに、自分が大人であることを信じていたの。大学に進んだ友人や家にいて花嫁修業を続ける友人に比較して、社会に出て働いているんだという単純な事実を実感したいということに固執していたわけよ。その私がさらに自説を主張するために、保守的だと決めつけていた両親の反対をおし切って、私のいる街からほど遠くない街で下宿生活を始めたわ。もっともS商事でもらうお給料が良かったということと、結婚することになった先輩の下宿が安かったというせいもあるけど。仕事は単純だったけれど社会人としてのBGの生活、更に、独立した個人の自活生活、そんな生活の中で私は時折、大人としての自分に陶酔していたわ。恐らくその頃の私は今までの半生の内で最も充実した生活を持っていたと信じられるの。そして、女性が真に男性と同等の権利を持つためには、こんな生活が必要なんだと覚ったの。

そんな私が同じ職場のMという男と交際し出したのは、そこいらの女性週刊誌に書かれてあるようなきっかけだったわ。そんな意味で私は普遍的BGの一人であることを確認したわけよ。私はほとんどMに夢中になったわ。Mが私の理想の男性像となり、今思うと単に彼が彼自身の退屈から逃れる手段と、欲望を合理的に満すためだけの目的で、私に新しい真の恋愛のあり方を教え、実践していくのを、その時の私はそれをMの強い愛のせいにしていたの。確かにその頃の私は、映画やテレビ、小説の中だけの出来事でしかなかった恋愛のいろいろなことが、自分の身の囲りで起るのをほとんど歓喜を持って見ていた。恋愛を始めて三ヵ月ばかりたったある夜、Mは熱っぽく私を求めたわけよ。今から考えると、その時期は遅過ぎていたし、何でもないことなのに、恋愛の掟のように話すことに、羞恥を感じるようなことだけど、その頃の私には重大だったの。わかる?そりゃあ、Mはそれまでに、そうすることが恋愛する者にとっては必然的で、自然の行為だと教え込み、私も反対する理由もなかったので、熱っぽく同意していたけど、それは暗い喫茶店が交わされる愛のささやきと同じ性質のムードに負けた同意だとふいに知らされたわけなの。あんなことは、明るい人通りのある公園で言

べきことじゃないのにね。その頃の私は、私はMであり、Mが私であって、私はMの目で見て、Mの頭で考えていると信じていられるほどに、Mを身近かに感じていたけど、怜悧なその時の私は、なかなかそうは出来なかった。ほんとに、あんなことは始めての女にとって事務的に事を運ぶべきじゃなかったのに。Mは知らなかったのかしら。あるいは知った上での計算かもしれない。とにかくそのとき私は拒み切ったわけ」

「なんだか僕は古い通俗小説でも読んでいるような気がしてきた」

「馬鹿なことを言って、話の腰を折らないでよ。それで、Mは怒ったようなふりをして帰ったわ。その時の空しさ、いいようもない寂しさ。自分がひどくいけないことをしたみたいで、激しく後悔したわ。で、彼は次の日、私を何げない風に誘ったわ。事実うれしかった。そして、前夜のような要求を期待する自分の心に気づいてはっとしたわ。でもその日は、いつものように喫茶店で話しただけ。私は実際にMが私を求めたら、それを受け入れられるかどうか自分に自信はなかったけれど、かえってそんなことを言い出さないMを不満に思ったわ。そして、Mが私から離れていきそうで不安だった。恐しかった。おかしいほどに焦ったの」

「その頃の君は、きっと通俗小説と週刊誌を読み過ぎていたんだね」

「少し黙っていてよ。いい気持で話しているんだから。それで、それからMと私は時々会ったわ。そして何げなくよそおうMに、私、腹立ちさえ感じてしまったの。私はだんだん離れていきそうなMを必死に引き止めようとしたわ。そして、私はMと完全にひとつのものになるには、もっとも単純な行為を肯定することの他にないと決心して、ある夜、むしろ自分から進んでいったわ。そして、その間中、私は呆けたように『これで私達はひとつになった』って、何回も言っていたようだわ。そして、そのそのことにMも同意したわ。私は安心したわ。単純で幼なかったのね。それからしばらくして、Mが私ではない女と恋愛し出したの。このMっていう男は、俗物であり過ぎたのね。その時の私にはあまりにも大きな衝撃だった。より親密に、より深い所で結びつきうるその行為を信じかけた矢先だけにね。そして絶望し、自殺しようと決心した。馬鹿馬鹿しいほどに、Mも私も俗説にのった道を歩いていたのね。その時の私にとっては、それ以外の真実はなかった自殺という行為を決行したけど、不幸なことに、この通りよ」

「生きていて良かったね。おめでとう」

「ありがとう。そしてね、この話にはおまけがついているの。私が自殺に失敗して生命をとり戻した丁度その日に、Mは交通事故でぽっくり。おかしなものね、死のうと思った私が死ねなくて、死のうなどとは思わなかったMが死ぬなんてね」

「そして、君はいつ訪れるかわからない死の不安におびえている。そして、死の不安におののきながら、君は現在の恋愛の中に生きがいを見い出しているってわけだね。出来すぎた話だね」

「そうね、考えてみれば……。でも、こんな話をして、少し、すうっとしたみた

い」

それから、ふっと、わたし達は黙り込んだ。わたしはの瞳の中を探ろうとし、Gもわたしの瞳の底から何かを探り出そうとでもするように、目と目をみつめ合う。いいようのない不安から逃れるようにわたしはGの手を探る。

「私達、お祈いに孤独なのね」

「えっ！」

ぽくは呆気にとられる。極く当然の、そしてもう十分に慣れきった今の状態、それが孤独という言葉で表現できるとは……。

ぼくは駅についた。そして、その時になって今まで歩いてきた、もうほとんど忘れかけている道が、駅にたどりつける道であったことを確認出来た。待合室にはもう誰もいない。しいんと静まり返ったこの雰囲気の中に、ぼくは何の程抗も感じないほどに、ぼくの心は虚になっている。ぼくは電車の時刻表を見上げる。郊外の私鉄の駅の時刻表には、通勤に利用される国鉄の電車のようなにぎわいはない。およそ強烈な恐怖さえ感じるあのにぎわいが。ぼくはそんな時刻表の数字を、上の方から足していく。途中でわからなくなって、再び、最初から加え始めていく。何度かやり直していくうちに、ぼくは紙とペンを取り出して、計算をし始めていた。最初は上りの時刻表の数字を総計し、次に下りの時幹表の数字を合計した。そして、今度はそれらの時間帯の合計の差を求めてみる。それらは同じ数でななく、零にならないわけは何故かに、ちょっとの間、思いをめぐらす。

そして、ぼくは壁に視線を移す。観光案内のけばけばしい嘔吐を催したくなるような色彩の中の哀れな文字を、声をあげて読み出す。

ぼくとYは、その喫茶店を出ると、夜の街に出た。ぼくらは、外観はそう見えるだろう、愛の楽しさ、幸福さをぼくら自身で思い込もうとするかのように、手をつなぎながら快活さをよそおう。それがぼくの傍にYがいて、Yの傍にほくがいるということのために、無理じいしたそれを十分に知りながら。

洋装店の飾窓をのぞき、そこに飾られてある婦人服に、端から勝手な批評をして行く。さっと頭に浮んだ意味の深くない言葉を使いながら。そして、ぼくらは本屋に入る。書棚から、てんでにばらばらに本を抜き取る。そして、さも内容を確かめるようにパラパラとページをめくり、いいかげんなところを開いてじっと見入るふりをしてうなづく。その後、買うのをあきらめたように閉じ、元にあったところにではなく、違った書棚にさし込む。そして、ぼくとYは微笑し合う。菓子屋に入って、店員にショーケースにある菓子の値段を、次々に聞いて行く。そして、店員がぼくらの意図を知って急にぞんざいな口調に変る時、Yはありき

たりな菓子を求め、ぼくが代金を払う。花屋で、赤いバラを一輪だけ買い、それをYのスーツのボタン穴に挿し込んでやる。

「僕は、君を愛している」
「私も、あなたを愛している」

わたし達にとって、この香しい言葉が常に必要なのだ。わたしの胸のバラのほのかな香りが、Gにより添って歩くわたしの心に届く。
そして、わたしとGの足は、ゆっくりホテルに向う。わたしが一層Gを愛し、Gが一層わたしを愛してくれるということを理由に。その実、わたしとGは、それぞれ相手に頓着することなしに、自分自身の歓喜をむさぼるだろう。

※　※　※　※

「送ってくれるわね」
「いいとも」
そこを出たわたしとGは、上気した頬を夜風に愛撫させながら、駅に向う。
「タバコ吸う？」
「うん」
Gはフィルター付きのタバコを箱ごとわたしに渡す。そして、Gもわたしの手の中の箱から一本抜き取ると、口にくわえマッチをする。その火がまるで貴重なものに思えるわたしは、わたしの手でその炎を覆う。わたしの髪がGの髪に触れる。そんな顔を近づけ合ったわたし達の視線の交点に、風に吹き消されそうなマッチの炎がゆらぐ。それはGの顔を明るく照らし、おそらくわたしの顔をも照らしているだろう。次々にタバコに火をつけた後も、Gもわたしもその火を見入っている。Gの瞳の中にその炎が小さく映る。それが、すぐ消えてしまうだろうことを、お互いに痛いほどに感じながら。

「じゃ、さいなら」
「うん、さようなら」

ぼくらはYの下宿の前で握手する。明日はあるいはYとは何の関係もない自分になるだろうことを漠然と感じながら手を握り合う。
Yは家の中に駆け込んで行く。そして、ぼくもそこを離れ、後をふり返えろうともせずに、夜更けの道を歩き始めた。

「私達、お互いに孤独なのね」

ふっと、ぼくはYの言葉を思い出す。
「それがどうしたんだ」
とも、あるいは
「そうじゃないんだ」
とも言わなかったぼく。その「孤独」ということばは、ぴったりぼくに密着している。

歩いて行く前方に、ぼくは道路の端の「○○薬局」という看板の下に、寝間着姿の男が、小さな窓から内に向って何か話しかけているのを見つける。

壁のポスターを全部読み終ったぼくは、出札口のガラス板の上を五十円硬貨で叩いた。しばらくして奥から駅員が顔を出した。
「もう終電車は出ちゃいましたよ」
駅員は無愛想にそう言うとひき込んだ。ぼくは何も聞かなかったように、いつまでも、軽くガラス板を叩き続ける。打楽器でも、叩いているような気分で、単調なリズムを何度もくり返す。

〈完〉

シナリオ
三人三脚

昭和41年（1966） 25歳作品

●人
☆悦子
☆信夫
☆正男

●所
☆マンションの一室

●時
☆昭和四十年頃

マンションの部屋の中央に、テーブルを挟んで肘掛椅子とソファがある。

壁に、まがいもののマントルピース。その上に、電話器と、額に入った船をバックにした船員姿の男の上半身写真。

悦子がソファで編物をしている。

彼女は、赤ん坊の白い靴下を編んでいて、既に出来上った片方はテーブルの上に置いてある。

開け放たれた窓で、レースのカーテンが風に揺らいでいる晩春の午後のひとと き。

編物を続ける**悦子**の顔が、時々ほころび、軽ろやかにハミングを口づさんでいる。

この曲は、後で出てくるワルツの曲だ。

電話が鳴る。

ゆっくり立ち上って、電話の方へ行く**悦子**。受話を取り上げる前に、片手で写真を取る。

悦子「(写真を見ながら)はい。あらお母様……ええ……そう、いよいよ今日よ……そりゃ、勿論、だって三ヵ月も待っていたんですもの、フフフ……そう横浜、もうじき帰ってくるわ、さっき電話があったの……そりゃあ、悦子、一秒でも早く。でもあの人も迎えに来なくてもいいって言うし、かえってここで待っていた方が、誰も見ている人がいないでしょ、ね……フフ、そういうこと。それに身体も大事にしないと……うん、三ヵ月……ええ……そんな、まだ……うん、悦子、女の子でも構わなくってよ……ええ……はい。じゃあ、さようなら……え、大丈夫、じゃあ」

電話を切った**悦子**、写真を両手で抱える。

悦子「(写真に)まっすぐ帰って来るのよ、寄り道なんかしたら承知しないぞ、分った?よろしい」

悦子は、写真に口づけする。

写真を元の場所に置き、ソファに戻りかけるが、思いついたように写真を取りに戻り、それをテーブルの上に置く。

悦子、編物を始める。

悦子「(写真に、編みかけの靴下を示して)ほら、かわいいでしょ。きっと赤ちゃん、悦子に似て、きれいよ」

やがて、編物を置くと、窓際に寄り、窓から下の方を見る。
ちらと腕時計を見て、部屋の方に振り返える。

悦子「(写真に向って)ねえ、正男、いやん、こった向いて(と、写真に近づき、写真を取り上げる)ほら、この曲(と、先刻のワルツを口づさみ)ね、また踏りましょうよ、ね、待ってて」

悦子、写真を置くと、ステレオに近づきレコードをかける。
部屋いっぱいに、ワルツが流れる。

悦子、写真を取り上げ、両手で持つ。

悦子「さ、正男、踊るのよ、はい、フフフ(悦子、踊り出す)……(男の声で)始めてお会いしますね(地の声、つまり彼女自身の声で)ええ、お友達に誘われて。あなたは、このパーティには、いつもいらっしゃるんですか(男の声で)ええ、ね、あなた冷奴お好きですか?(女の声で)は?冷奴?(男の声で)ほら、トウフを冷して、あれでビールを飲むの最高だな。庶民なんですよ、僕あ。(女の声で)あの、あまり?……。(男の声で)お上手ですね、それに素敵だ、あなたは。(女の声で)そんな、困りますわ、ご冗談をおっしゃっちゃ。(男の声で)きれいだ、本当に素晴しい人だ、あなたは」

突然、入口のチャイムが鳴る。

悦子、写真を置くとはっとして、ドアに近づく。
室内に、ワルツが残る。

ドアを開けて、外と応待する彼女の後姿。やがてしょんぼり部屋に戻る。

悦子、写真に肩をすくめて笑ってみせる。
しばらくぼんやり立たづむ。
ふと手の写真に気づき、元のマントルピースの上に置く。
ステレオに近づき、レコードを止める。

悦子「さてと、何しているのかしら」

窓辺に行って、外を見たり、部屋の中を行ったり来たりする**悦子**。

悦子、ふと微笑すると隣室に行く。

すぐ、テニスラケットを持って戻る。

悦子「(写真に)さ、今度はテニスよ。あなたは上手だったわ、悦子はいつも負け

てばっかりいたわね。ほら、皆んなで軽井沢へ行った時、悦子、あなたに負けてべそかいちゃったわね、だって本当にくやしかったんですもの」

悦子、ラケットを軽く素振りする。

やがて、見えないボールをサーブする。

打ち返えされたボールを打ち返す。

ポーンというボールの弾む音が聞えると……

〈イメージ〉

ショートスカートをはいた**悦子**が、コートでボールを追っている。

ボールがラケットに打ち返され、白い雲の流れる空に飛んでいく。

まわりに若い歓声と拍手。

汗だくになってボールを追う**悦子**。

そして、ボールを逃がし転ぶ**悦子**。

大きくなる若い歓声と拍手。

汗の中で、泣きべそをかく**悦子**。

デゾルブして、

悦子、部屋でラケットを抱きかかえている。遠くを見つめる目。

一瞬、**悦子**の目の中に寂しさが走る。

ゆっくり、ソファに戻る**悦子**。

悦子「(無理に明るくなろうとして)そして、ドライブ。あなたが運転して、悦子が助手席……」

一瞬、ブレーキの音。

〈イメージ〉

悲鳴を上げて、運転する男に寄る**悦子**。明るく笑う若い男(後姿のみ)。

フロントグラスの向うに拡がる鬼押出、続くハイウェイ。

イメージが続くうちに、ドアのチャイムが鋭くインサート。

はっと期待に輝く悦子の目。悦子、ドアに駆けるように近づく。

そして、一瞬、ドアの前にととまると、大きく深呼吸する。

悦子、ドアを開ける。
と、驚いて、あわててドアを閉めようとする。
が、外から強い力で押し返えされる。
ドアから手を離し、うろたえる**悦子**。
部屋に入ってきたのは、**信夫**だ。

悦子「困りますわ、信夫さん。ね、お帰りなってください」

信夫、構わずソファに腰を下す。
ラケットに気づき、取り上げて素振りする。

信夫「外のホテルでは会っても、ここに来られちゃまずいというわけですか」

悦子の視線がふと**正男**の写真に走る。

信夫「(それに気づいて)ああ、なる程、今日ですか、ご主人のお帰りは、僕も会いたいですね、彼とは、もう、そう半年、会っていない。あなたが結婚する前からですからね」

悦子「ね、お願い。今日は帰って……」

信夫「親友だったんですよ、僕らは……あなたが彼と結婚を決意する時まではね」

悦子、部屋の隅でうなだれる。

信夫、ラケットを持って立ち上ると、**悦子**の側に寄る。
彼女の前でラケットを振って、

信夫「よくやりましたね。あなたは一度も僕に勝てなかった。それでもあなたは何回も何回も手向かってくる。ほら、思い出しますね、昨年の夏、軽井沢のコートを。あの時、あなたはとうとう泣きべそをかいてしまった……僕らは三人、いつも一緒でしたね」

部屋をぐるりと見回した**信夫**、やがて写真を見て、近づく。

信夫「(写真に)お前は、ただ見ているだけだったな。いくらすすめても、これを握らなかった」

信夫、写真に向ってゆっくりラケットを振る。

悦子、ふっとため息をつくと、窓辺に行き、**信夫**を無視するようにレースのカーテン越しに外を見る。

信夫「素晴しい生活だ。高級マンション、この豪華な調度品の数々、僕はあの頃、いつもそんな夢を見ていた。そして、それらの中には、いつも静かな微笑をたたえたあなたがいた、というわけです」

悦子、依然として彼を無視している。

信夫「僕は信じていた。あなたを、あなたの愛を……ま、いい、それはいい、こうなってしまった以上、僕は何もいわない。結局、あの時、親父の会社が倒産し、僕の専務の肩書きを一瞬にして喪ったことが……」

悦子「(振り返って)いくら欲しいんです」

信夫「と、外国航路、高級船員の若奥様はおっしゃる。しゃあしゃあと。その人は、この僕のこの胸の中で、何度も愛している、愛しているとおっしゃったのだ」

悦子「(ヒステリックに)出ていって!でないと警察を呼びますわよ」

信夫「どうぞ、どうぞ(急ぎ足で電話の前に行き、受話器を取り上げ)ええと、一一〇番でしたね」

だが、ダイヤルには手をかけずに、受話器をしばらく耳にあてている。

信夫、写真を取り上げる。

信夫「正男、楽しいじゃないか、え、人生ってやつは。学生の頃、田舎から出てきたお前に、いろんなことを教えたな。いろいろな所に連れていき、タバコ、酒、麻雀。喫茶店すら知らなかったお前だった……」

信夫、しばらく写真を見ている。

悦子、ゆっくのソファに戻り、彼を無視するように背を向け、赤ん坊の靴下を編み出す。

信夫「(そんな彼女を見て、ふと思いついたように写真を額から外し、写真の裏に、ポケットから紙片を入れる)苦学していたお前に、僕は何回も金を用立ててやったことがあったな。返せないことは分っていても、それでも、お前は僕の親友だったから。僕には大勢の友人がいたが、お前には僕しかいなかったしね。それが、お前の奥様は金を恵んでくれるんだって、出ていけだって、この僕に」

悦子、黙々と編み棒を動かす。

彼女の後に立った**信夫**、背後から彼女を見下す。

悦子「お願い、お帰りになって、何でもしますから。今日は……」

信夫「(ゆっくり彼女の前の肘掛け椅子に近づき)罪ほろぼしのために、結婚後も、僕に抱かれた、というわけですか」

信夫、テーブルの上の靴下の片方を取りあげ、指で弄ぶ。

信夫「おめでとう奥さん、ご主人のいない退屈もまぬがれますね。というと、僕

は、会ってもらえなくなり、ホテルに連れていってもらえなくなり、そこの料金を払ってもらえなくなるってわけですね。いつですか」

悦子「……」

信夫「ようし、男の子でったら茂樹、女の子だったら、そうだ幸子、そういう名前をつけなさい」

悦子「あなたのご指示は受けません」

信夫「どうして？もしかしたらってこともあるじゃないですか……もっとも、子どもの父親を知っているのは、母親だけだっていいますけどね」

悦子、ソファのクッションを**信夫**に投げつける。

そして、**悦子**、苦痛に歪んだ顔をひきつらせ、泣き出す。

信夫、そんな**悦子**を冷たく見ている。そして、ゆっくりクッションをソファに戻し、立ち上る。

ステレオの傍に行く。

信夫「（レコードを取り上げ）なる程、そういうわけですか（と、悦子を見て、レコードをかける）」

先刻のワルツが流れ出す。

悦子、びくっと顔を起し、**信夫**の方を向く。

信夫、少しの間、聞いている。

信夫「そうこの曲、僕とあなたが始めて会ったパーティで、最初に踊ったワルツ。（悦子に近づき）さ、お嬢さん、踊りましょう」

悦子「いや！止めて！」

信夫「さ、踊りましょう（悦子の腕を無理に取って）さ、いいですね」

悦子を力づくでも立たせる**信夫**。

悦子、必死に逃れようとするが、逃れられない。

やがて奇妙なワルツが始まる。

信夫「始めてお会いしますね。このパーティは始めてですか（悦子、逃れようとする）あなた、冷奴お好きですか。ほら、トウフを冷して、あれでビールを飲むのは最高だな、庶民的なんですよ、僕は……」

悦子「いや！いや！」

信夫「お上手ですね。それに素敵だ、あなたは……きれいだ、本当に素晴しい人だ」

悦子、悲鳴をあげて、**信夫**から逃れ、床に倒れると激しく嗚咽する。

信夫、そんな**悦子**を見ている。
やがて、ステレオに近づき、更に、ボリュウムを上げる。
耳を両手でふさぐ**悦子**。
乾いた声で笑う**信夫**。そして、写真に近づき、じっと見入る。
室内に流れる思い出のワルツ。

その時、ドアのチャイムが鳴る。
はっとして、入口のドアを見つめる**悦子**。
再び、チャイムが鳴る。
信夫、**悦子**に近づく。

信夫「さあ、ご主人のお帰りですよ」

悦子、立ち上がり、壁の鏡に寄ると、衣服や髪のくずれを直す。
信夫、立ったままドアを見つめる。
いらだつようなチャイムが鳴る。
悦子、気を鎮めようとしながら、ドアに近づく。
ドアを開ける。
入ってきた**正男**、**悦子**を抱こうとして、**信夫**に気がつく。
正男から離れる**悦子**

信夫「やあ、お帰りなさい。どうでしたか、長い航海生活は」

正男、**悦子**を見る。
悦子、その視線を逃れるように、**正男**を部屋に導く。
信夫、ステレオに近づき、スイッチを切る。

信夫「いま、奥様とワルツを踊ってたところなんですよ」

悦子「ビール、冷えてます」

悦子、隣室に消える。
正男、黙って肘掛け椅子に座る。
信夫も、**正男**に向い合って座る。

信夫「いつ、ついたんだい」

正男「やっぱり、そういうわけか、俺、帰ってくる所を間違ったようだな」

信夫「たくましくなったな。見違えたよ。外で逢っても、気づかないだろうな」

正男「俺が俺でなくなる。海はそういう所だ。いや、陸でも俺が俺でなくなっているってわけだ。玉手箱が欲しい心境だよ。で、奥さんは元気かい」

信夫「ああ、いま考えているところだよ。冷奴にしようかしら、それとも枝豆にしようかしらってね。(コップをあおる手まねで)海に鍛えられたんだろ」

正男「日米電機の専務のお嬢さんなら、今頃は、課長といったところかい」

信夫、**悦子**がいるキッチンの方を見る。納得したようだ。

正男「結婚式は、あのホテルプリンセス。結婚旅行はハワイだってな。いいところだ、のんびりできて」

信夫、笑い出す。

信夫「それで、私は振られました。正男さん、どうか私と結婚してください、ってか」

信夫、笑い続ける。

悦子、ビールとグラス3個、枝豆と冷奴を運んできて、黙ってテーブルの上に置く。

信夫「(悦子に)ああ、奥さん、さっきはダンスに夢中になって忘れておりましたが、妻が、くれぐれも、よろしくと……」

悦子「それはごていねいに。さすが日米電機の専務のお嬢さまだけあって、美人で、お上品で、私なんぞは足元にも及びませんわ」

信夫「いえいえ、見かけによらず、あばずれの、とんでもない大嘘つきでしてね。で、我が家でも、近々、赤ん坊が生まれるんですよ。いやあ、世間様には恥しいお話しなんですが、昨年の夏、軽井沢にドライブに行ったとき、できちゃったらしいんですよ。それで仕方なく、式を挙げた、と。こういうわけでして、どうも」

正男、**悦子**の編んでいた靴下に視線を移し、手を延して取り上げる。

それを弄びながら、

正男「子どもができちゃったじゃ、そのお嬢さんと、きちんと式を挙げなくちゃあな。ましてや、そんなことには厳しいお家柄なんざんしょうからな」

悦子「うちは、きっと男の子ですわ、あなた」

正男「ああ、高校くらいまでは上げて、あとは工員にでもさせるか。それでよ、赤旗を振られて、革命でも起してもらおうか」

悦子「やはり、ちゃんとした大学くらいは出してあげなきゃ、ね、信夫さん、同じ学年なんだから、同じ大学もいいですわね」

正男「(**信夫**に)で、お前、いま何をやっているんだい」

信夫「(**悦子**に)あなたのご主人、いま、何ておっしゃったんですか」

悦子「いえね、主人は、日米電機のオフィスでも、ピーコックルックは許可されるんでしょうか。課長さんのお立場としては、どうお考えなのでしょうか、とこう申しておるんですが」

信夫「(**悦子**に)なるほど。それじゃ、ご主人にこうおっしゃってください。面白いもので、世の中ってものは、捨てる神あれば、拾う神ありでして。倒産で、駄目になった親父の跡を継いだ僕に、スポンサーがついて、新しい事業を始めた、と」

悦子「じゃ、いまは社長さん?」

信夫「いえいえ、まだまだ課長なんですよ、日米電機の。妻には、早く部長にしてくれるように、専務の親父さんに頼んでくれっていってるんですが、なかなかね」

悦子「どんな事業なんですの。あなたがお始めになった会社は……」

信夫「(**正男**に)海の生活って、楽しいんだろうな。僕、新婚旅行で、日がな一日、のんびり海を見ておりましてね、いろいろと海の上での生活を想像してたよ」

黙って聞いていた正男、やにわ立ち上がり、電話に近づき、ダイヤルを回す。

正男「(受話器に、大声で)あ、南海荘?あ、俺だ、俺。すまんが、うちの母ちゃん呼んでくれや。いるだろ?」

信夫と悦子、呆気にとられて、正男を見つめる。

正男「(電話口で)ああ、お前か。……何、ガタガタいってんだい、馬鹿やろ。……いいじゃねえか、久しぶりでちゃんとした制服を着たんだ。しまいっぱなしにせんと、ナフタリンぐらい入れておけ。せっかくの服、ムシに食われていたぞ。全く、カビ臭くって仕様がないや。……あ。あの、鉄にな、今日中にあと三人くらい、若いの見つけて、今晩、俺んとこに連れて来いっていっておけや。それから、酒、忘れんなよ。……馬鹿やろう、呑めりゃいいんだ、あいつらは。……ああ……分った。今晩、泊らずに帰ることにする。よし、分った、早目に銭湯行って、きれいにしとけや。んじゃあな」

正男、席に戻る。ビールを一気にあおる。また、注ぐ。

正男「(**悦子**に)で、いつなんだって、予定日は?」

悦子「……」

正男「赤ん坊だよ」

悦子「……三ヵ月、ですって……」

正男「(壁のカレンダーを見て)うまく合ってやがら。俺が、この前にここに泊った頃だったな」

正男、高く笑う。

信夫「(正男に)いつ、船を降りたんだい」

正男「信夫、こいつをお前に返すよ。こいつは、まだお前に惚れているんだろ。いいって、いいって。分ってんだから、俺には」

信夫「何だったら、僕んところに来ないか。いま、人手が足りなくて困っているんだ。何人か、まとめてめんどうみてもいい。待遇は、悪いようにしないから」

正男「(笑う)お前、まだそんなことをいっていんのか。さっきもいったろうが、俺は俺でなくなってるってよ。海が、変えちまった、全く、徹底的によ」

悦子、なすすべもない。

正男「こいつが、俺んとこに来たときな、俺には分っていたんだ。振られたのはこいつじゃなくて、失業したお前だってことが……。俺は、学生時代から、お前の後にくっついていた。金も、いろいろ融通してもらっていた。どれだけ助かったか。友だちらしい友だちもいない俺を、お前は親友だといって、よくしてくれた」

信夫「憎んでいたのか、僕を……」

正男「どうしてよ。親友を憎むはずがないじゃねえか。そんで、俺は、こいつと結婚をした。あのとき、俺は勝ったかなって。ざまあみろって、気もしたんだ、あのときはな」

信夫「一体、僕はお前に何をしたっていうんだ」

正男「こいつが、心底、好きだったのは俺じゃない。俺の将来だったわけだ。それも、俺を愛しているふりをして、俺ん中に、お前を見ていたんだ」

悦子「(ヒステリックに)いえ、私は、あなたを、愛していました、心から」

正男「ええ、ええ、ボクもあなたを心から愛していました。でもね、お嬢さん、ボクは気がついたんですよ、あなたは信夫さんをボクよりも、ずっとずっと愛しているということを。それでね、ボクは、信夫さんから受けたそれまでのご好意を恩返ししようとね。信夫さんが、しかるべき収入と社会的地位や信用が得られるまで、あなたをお守りしょうとね、そう決心して新婚生活を送ってきたんですよ」

悦子「嘘、嘘よ。悦子は、あなたを愛しています。あなたも、悦子を愛してくださっている。私は、毎日毎日、あそこの(写真を指して)あなたとお話しをしていました」

正男「(写真に近づきながら)あなたとダンスをしました。あなたとテニスをしました。あなたに口づけをしました。(写真を見て)口紅を拭いてから、口づけをしてもらいたいもんだな」

正男、額を取り、ハンカチで拭く。しばらく弄んだ後、額の裏を開ける。紙片が落ちる。それを拾って、笑い出す**正男**。

いぶかる**悦子**。

正男「(悦子に近づき)隠れキリスタンが発覚したら、火あぶりの刑だったんだぞ、歴史は勉強しておくもんだ」

正男、その紙片を**悦子**に突き出す。

悦子、それを見る。はっとして、**信夫**を見る。

信夫「(紙片を取りあげる)あ、これは僕の写真ですね。(正男に)お代官様、この隠れキリスタンを、いかがいたしましょうか」

正男「刑は決っておる。お上のきついお達しにより、火あぶりの刑はまぬがれまい」

信夫「はい、そう致します。お代官様」

ライターを取り出し、**悦子**の顔の前で点火する。

悦子、それを思いきり平手で飛ばす。部屋の隅にまで、飛んでいく。

正男「いや、時代は変った。現代は、どんな宗教を信じてもいいと、日本国憲法は定めておる。法律は勉強していてよかったな。それでじゃ、信者は信じるその神のもとに帰るべきだと、わしは思う」

信夫「それでも、彼女は、お代官様のお子を身ごもっておると、そう申しておりますが」

正男「わしの子か、ハッハハハハハ……、交りもなきはしためを、このわしがみごもらせたとは、きついな。それは神のみこであろう」

悦子「違う!あなたの子よ、正男、あなたと私の子よ!」

信夫「と、申しております。また、私といたしましても、それが自然だと思いますが。何故なら、神は、このようなけがれた女に、よもやその尊いお子を宿さぬように、用意万端整えまして、行うものでございますから」

正男「はて、そうなるとますます分らなくなってきおった。医学は勉強しておくんだったな、これじゃ。実はな、わしもかつての尊いお方から、女をおあずか

りするには、宿しちゃいけないと思ってな、現代医学のお力ぞえをいただき……カットしちまってた、というわけですがな」

信夫「とすると……」

突然、**悦子**が大声で笑い出す。

悦子「嘘よ、みんな嘘、嘘。私は、別に妊娠なんかしていないわ」

信夫「またしても、ああいっておりますが」

正男「しかし、やっぱり、写真を隠し、それに口づけをしたりすることを見ると、やはり、彼女はお返しすべきかと思うんじゃが」

信夫「実は、お代官様、あの写真は、わけあって私めが、こっそり隠したものでございます」

正男「お主も、なかなかの知恵者じゃのう」

信夫と**正男**、顔を見合わせて笑い合う。

悦子「(信夫に)違うわ、私がそうしたんです。私は、信夫さんを愛しています。正男なんか、最初から嫌いでした。私は、ずっと信夫さんを愛していました」

正男「ほれ、娘もさように申しているではないか」

信夫「全く、社長さんなんてなりたくないものでございますなあ。……正男、さっきの話だが、本当に僕の会社に来て、片腕として手伝ってくれないか」

正男「今度は、俺に何をあずかれっていうんだ。悪いが、俺はもうごめんだ。おそらく、俺の住む世界とは違っているんだ、お前のいる社会は。お前の住むところでは、倒産してもすぐ援助がある。だが、俺のところは、倒れちまったら、もうお終いよ。それに、俺は海から離れて陸では暮らせない」

信夫「しかし、さっきの電話は」

正男「(笑う)上手かったろう。船の上で、今度、芝居でもやってみるか、座興に。ダイヤルを何回まわしたか、注意して見ておくべきだったよ」

悦子「信夫、私は本当に、あなたを愛しているんです。どうか一人にしないで!」

信夫「いえ、奥さん。私にはご承知のように、日米電機の専務の娘の妻がいるんです。実は、僕も知らなかったんですがね。で、日本では一夫多妻は、法律で厳しく禁じられているんです」

正男「そうそう、法律はよく勉強して、しっかり守らなくちゃあな」

悦子「何よ!あんた達!グルになってたのね。二人して、私を……一体、あたしのどこがいけないのよ。何がいけないのよ!あなた方は、愛を信じろっていうの!愛があれば、それで生きていけるっていうの!……私だけじゃないじゃな

いの、皆んな同じことしているじゃないの、どうして、どうして……」

うずくまる**悦子**。

信夫「正男、どうするんだい、これから」

正男「予定外でちょっと早いが、船に戻るよ。どうだい、今夜は飲み明かそうか。今度は、ブラジルだ」

信夫「いいね」

正男「あんたともこれっきりだろうな。今晩は、俺におごらせてくれ。いろいろいいつくせないほど、世話になって、そのお返しということで……」

信夫「（うなづく）」

うずくまっていた**悦子**、よろよろ立ち上がる。

ステレオの前まで寄ると、レコードをかける。例のワルツが流れ出す。

悦子、その曲に乗ろうとするが、足がもっれてなかなか乗れない。

正男と**信夫**、グラスに残っていたビールを飲み干す。

二人、部屋を出る。

室内に、ワルツが充満してくる。

悦子、よたよたと踊るが、すぐしっかりとステップを踏む。

そして、軽やかに、しっかり踊る。

〈終〉

あとがき

あれから三十二年にもなるんですね。いま、私は五十七歳、二十五歳の君、つまり若い僕からのメッセージに、どう応えたらよいのか戸惑いはありますが、応えられるだけ、応えてみようと思います。

まず、気に入らない点。君は「二人だけで愛しあおう」の中で、六十歳を老人としています。嫌悪の対象だとも言っています。原本では五十五才としていました。でも、その歳を過ぎた私としては、冗談じゃない、断じて老人ではない、と。時代も変ったのだし、君からのメッセージを忠実にそのまま再録しようと決めてはいましたが、いくらなんでもこれだけはと、五十五歳を六十歳に直して再録したのですが、それでも不満です。いま、六十歳のひとを老人と呼んではいけませんし、呼ぶ人も少ないでしょう。

あの戦争の傷跡をまだまだ深く残していた時代、結婚を夢みてせっせと貯めたお金が十万円ほどの世界、職場で働く女性がＢＧと呼ばれ、タバコのフィルター付きのハイライトが大切にされた時代、同伴喫茶店が恋人たちにやさしかった時代、そんな香りのする君の世界は、できる限り残しておいてあげましょう。

でも、そうなんだ、私は六十歳に近づいている、老人の領域に達しているんですね。あのとき君は、認識してはいなくても、どのように生命を活かそうかについての考えが及ばなくても、少なくてもあと三十二年は生きられるという状況にありました。が、いまの私は、君には思いもよらない齢に達していることだけは確実です。とっくに折り返し点を過ぎ、これからあと何年生きられるのか、それは二十年なのか、十年しかないのか、いや三十年も生きられるかもしれない。わかりませんがが、君よりも一日、一時間、一分、一秒の重さは違っています。

あれから、私は何をしてきたのでしょうか。二十五歳、日立製作所武蔵工場を辞めた年です。その後、ガソリンスタンドの洗車機のサービスエンジニア、機械設計事務所で自動械械の設計等の仕事を経て、いまのマーケティング関連の企画やツールの制作を担う仕事につきました。

私のいた職場は、苦しい生活から解放される、明るい希望の持てる環境だったはずです。日活映画、吉永小百合さんの「キューポラのある街」で、主人公が苦しい境遇から、「苦しいときには手のひらを見つめてみよう」と、仲間皆んなで

力を合わせて脱出できる職場として描かれたほどのところでした。東京オリンピックを機に日立武蔵という女子バレーチームが台頭したころでした。君はあの職場の中で、いまならとうてい信じれないような、少なくない表現規制はありましたが、企業内文化活動を満喫していましたね。会社の費用で文芸誌をつくり、文化祭で演劇を上演し、コーラスや絵画、書道を楽しむ。楽器演奏部もあり、スポーツにも野球、サッカー、テニス、バスケット、山岳部と多彩な活動が行われていました。時代もあったのでしょうが、企業はさながら学校の延長といったさまでした。そんな恵まれた環境があってこそ、君は好きなことをやってこられたのですね。

そんな環境を捨てて以来、君が書いたような小説やシナリオなどを書くということはなかったのですが、三十余年、あるときは一日に四〇〇字詰原稿用紙換算で二十～三十枚以上というペースで文章を書きまくってはきたことも事実です。

それは広告やカタログ、ＤＭのコピーであり、セールスマニュアルであり、セールプロモーション用のスライドやビデオなどのシナリオ、ＰＲ誌やハウスオーガン、あるいは、マーケティングや販売促進の企画書など、マーケティング・ビジネス分野でのコミュニケーションのための文章でした。

売りの現場が、まだメーカー主導のもとにあって、ワープロやパソコンのない時代、万年筆から３Ｂの鉛筆に代え、さらにはシャープペンでと、ペンだこをつくりながら、書くことだけは書いてきました。私は、原稿を枚数ではなく、目方で売るといわれたほどでした。書くという行為の代償は、誰から誰に支払われるかは別として、流行作家なみの値段だったようです。君が、企業という環境の中で、余技としての活動で感じていた満足とは別質の喜びや満足感を味わってきました。

私生活について話しましょう。君は、Ｒさんと恋をして、確か、恋の終止符を打ったのが二十四歳の頃。ここで再録した作品集は、その恋がもたらしたエネルギーが創らせたものといってよいでしょうね。その恋が、あまりに真剣でありすぎたために、見なくてもいい現実や、確かめなくてもいい情念を追求した中で、そのぎりぎりの思いを創作に託していたのでしたね。これらの作品をつくらせたのは、原動力のひとつはＲさんだといってもいいかもしれません。

日立を辞めるとき、別れてもう二年かそこいら経っていたＲさんとの逢瀬がありましたね。新しい天地で飛躍しようとする不安の中にも、もう後へは引けない決意を秘めていた君からの申し出を快く受けてくれたＲさんでした。その後の作品が多分「三人三脚」のシナリオで、その後、君はこの種の作品を書かなくなります。

あのとき、Ｒさんと話したとき、あまりにもＲさんが「君ナイズ」していたこ

とに気づきます。考えること、話すこと、いろいろな行動が、君と過した年月の影響を強く残していました。それは生来の性癖といってもよいほどのものになっていました。Rさんは夜も更け、別れが迫った頃「今夜は、家に帰らなくてもいいの」とぽつりともらしました。それにまともに応えられない君は、以来三十余年、何かの折りにそんな思い出を温めながら生きることになったのです。

その後、もう恋をすることもありませんでした。シナリオ修業時代の仲間との恋らしきものはありましたが、シナリオライターからコピーライターという業種への関心を強めた頃、また、利己的な性格からも、長続きしない関係でした。

結婚したのは、三十一歳のときです。結婚した兄に代って母親と住むことになり、世間的な信用ということからも結婚しなければならない。まだ具体的ではない妻と同居できる妥当な家賃の家に住もうと、多摩川を越えた街で見つけたアパートの大家さんの紹介で、いまのカミさんと知り合い結婚することになりました。秋に出会って、翌年の春に挙式というあわただしいものでした。

その頃、仕事が面白くて、まともなデイトの時間もなく、いわゆる恋らしき思いがなかったようです。恋に燃えつき、その方面では抜けがらになっていたのかもしれません。いろいろな事情で、母親とは別居することになりましたが、男子と女子の二人の子らに恵まれました。その子らは、君と同じ年代になっています。

愛って何だろうと、君からのメッセージである作品集を改めて読みながら考えます。愛という絆でいくら強く結ばれていても、所栓、ひとは一人なんだというわかりきったことをテーマにした君の作品は、その後の、私の生き方の出発点になったことは事実です。どんなに愛し合っても、身体で交り合っても、自分は自分でしかないもどかしさへのいらだちがモチーフになってはいますが、それは、私が生きているいま、どんな共感性を持つものでしょうか。だからこそ、ひとの心に近づかなければならないのかもしれない。それは、異性へのエロスの愛を越えた、アガペの愛だという認識が、ポーズだけかもしれませんが、その後の私のコミュニケーションづくりの「ウリ」の基本にしてきたようです。

また君の時代に、愛していれば身体の交りをするのが当然という概念があるにしても、それは結婚という社会的に認知された状況の中でこそ許されるという強い「掟」が生きていました。恋愛の中にその関係をどう持ちこむか、君自身が悩み苦しみながら、それが別離の一因にもなるほどの精神環境の中で青春期を過したことが、その後の性的生活を悲惨とはいわなくても味けないものにするにせよ、節度ある人間関係、特に男女関係づくりのためには幸いしているのかもしれません。とにかく、婚前交渉はタブーであり、その掟を破ることがメディアのトピックスにもなる時代でした。もし、君がいま、私がいる時代に青春時代を過してい

るなら、もっと別なモチーフやテーマの作品が生まれているのかもしれません。
タブーが愛を育て、ドラマタイズすることは、シェークスピアはもちろんのこと、古くからの劇や物語のモチーフになっています。君の愛のテーマは、タブーを見すえながら、その根源にひとの孤独感の幻の解放を実現しようと錯覚した、やさしいひとたちの生きざまなのかもしれません。恋においても、かつてのようなタブーがなくなっているいまの時代、君の感性は、どんなドラマをつくるのでしょうか。どんなひとたちに、どんな生き方をさせながら、いまの時代の人たちにどんな質と量の感動を与えてくれるでしょうか。

それを見つけるのが、多分、私の仕事なのかもしれません。私は、君からのメッセージを受けとめ、根源は同じですが、仕事でのコミュケーションづくりとは違った、ひとからひとへの新しい感動づくりができないかと考え、それを実現しようと思っています。

それが、私の、君への愛であり、愛の行方を追い求める、私と君の、コラボレーションなのかもしれません。まだ、多分もう少しはあるだろう時間の中で、この作品集の続編「柏倉利明作品集2」を、どんな形にしろ出版したいと考えています。

1999年4月

柏倉利明作品集１
「愛の行方に」

発　行　１９９９年４月
著　者　柏倉　利明
東京都多摩市永山三-四-四-二〇九
電話　０４２（３７４）１９４６
発行所　株式会社クリエイティブスタッフ
東京都新宿区若葉一-八-四
電話　０３（３３５３）６５４５⑫